

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 6 - 9

## 「卒業式」

### 目次

卒業式をめぐって	2
要 約	6
■1 これが日本の卒業式	10
●式次第をめぐって .....	11
●会場のようす .....	14
●クライいのがお好き ? .....	23
■2 各地の卒業式	27
●卒業生の服装 .....	27
●式の雰囲気 .....	31
■3 卒業式の日まで	35
●卒業式のための話し合い .....	35
●練習のようす .....	39
■4 新しい卒業式を求めて	41
●卒業式の評価 .....	41
●ちいさな提案 .....	43
資料 1 ①～⑯ .....	46
資料 2 調査票見本および集計表 .....	64

# 卒業式をめぐって

東京学芸大学助教授 深谷和子



卒業式と聞けば、たいていのおとなたちの胸には、「仰げば尊しわが師の恩」というあのメロディーが浮かんでくるに違いない。そして、われわればかりでなく、われわれの両親世代の人びとも、祖父母世代の人びとも、みな一様に胸をじーんと熱くするのではなかろうか。とくに筆者より少し上の年齢の人びとにとって、義務教育は6年間だったから、小学校の卒業式は子ども時代の終わりを告げる「区切り」のできごとだったのである。先

生という第二の親のもとを離れて、いよいよつめたい世間の中に入つてゆかなければならない。まさに「思えばいととしこの歳月、今こそ別れめ、いざさらば」であったのだ。しかし高学歴社会の到来を迎へ、高校進学率が9割を越す現在では、小学校の卒業式は、ちょうど長い学校生活のまん中に位置する。ただの通過地点に過ぎないのである。昔のように大仰に感傷にひたる必要があるのだろうか。

ここで、海外事情を描いた本の中から、いくつかの国々の卒業式の情景を見てみよう。いずれもわが子と共に外国に一定期間暮らした人びとが、親の目からとらえたスケッチである。

『小さい目のフランス日記』p.103より  
(根本長兵衛 朝日新聞社 昭和59年)

6月の下旬、子どもたちが待ちかねた終業式の日がやってくる。いつもはびったりと閉ざされ、特別の許可がない限り父兄もしきいをまたげないソーセイ小学校のグリーユ(鉄柵)の門も、この日は開け放し。両親や兄弟と連れだってやってくる子どもたちは、皆、うきうきとうれしそうだ。(中略)

終業式は卒業式も兼ねているのだが、卒業して行く第7学年の子どもたちも、にこにこしている。間近に迫ったヴァカンスの期待でわくわくして、すでに心ここにあらず、といった感じの父兄や子どもも少なくない。「仰けば尊し、わが師の恩……」といった温った感傷は全く感じられず、先生たちも含めて、みんな底抜けに明るいさばさばした終業式である。終業式だからといって特別に着飾つくるママも見当たらず、ジーンズ姿の若い母親もいる。子どもたちも、通学のときと変わらぬ普段着のまま。(中略)

終業式は卒業式を兼ねるばかりでなく、子どもたちが「ジュール・ド・ブリ」と呼ぶように、賞品授与式でもある。学業成績の年間評価がトレ・ビアン、つまり「優等」と判定された各クラスのトップから3、4番までの子どもが壇上に上がり、それぞれ学年ごとにふさわしい本やレコードを担任の先生から受け取る。優秀賞だけでなく、「よい友だち賞」や

体育賞もあって、この賞品授与式が終業式のメイン・イベントなのである。(中略)

賞品授与に先立って、柔道、フェンシング、体操などのいくつかの「型」が子どもたちによって演じられるが、いずれも数分たらず。ついで第11学年=1年生から順番に優等生が壇上に上がって賞品を受け取る。女の子だと絵入りの「眠れる森の美女」やアンデルセンの童話集、男の子だと「ナポレオン」ややさしい動物図鑑の本が、きれいなリボンで飾られ手渡される。表紙の裏に「賞証」が張られており、「19XX年6月、X学年のだれだれ、アルミエール・ブリ(一等賞) うんぬん」と記入がある。

私たち日本人に奇妙に見えるのは、校長先生も担任の先生もただ生徒の氏名を読み上げるだけ、もらった子どももお辞儀をするわけでもなく、ほんやり壇の上に並んでいるだけ、ということだ。子どもが賞品を受け取る瞬間に、校庭の生徒たちや両親から拍手が起るが、賞品授与式という言葉から連想されるものしさ、いかめしさは全く感じられず、ごくあっさりしている。

たんたんとしているのは、賞品授与式だけではない。市の代表や校長先生のスピーチを聞いてびっくりした。3ヵ月近い長いヴァカンスに入るのだから有効な夏休みの過ごし方、少なくとも「よく遊びよく学べ」式の長い訓示があるのでだろうと思っていたら、拍子抜けした。

過去1年間の学校行事の手短な総括、PTAの予算収支報告のような事務的な話が大部分、壇上に登った大人たちは「ブロンゼ・ブー・ビアン(夏休みの間に、よく日に焼けてくるように)」と異口同音にいそばかりで、子ども

に対するお説教めいたことはいっさいいいわない。ただ教育委員会の代表が、第7学年修了の卒業生たちに「中学へ行くと、勉強も一段とむずかしくなる。小学生のときとは違った心構えで9月から勉強するように」といったのが唯一の注意だった。

卒業生代表が、先生に感謝の言葉を述べることもなければ、校長先生が卒業生だけを対象に特別な話をすることもない。『螢の光』も、校歌の斉唱もないから、「ブロンゼ・ブーピアン」という言葉を背に、子どもたちも両親も三々五々散り始める。私たち日本人の目には、何ともしまらない、物足りないものに見える。『さばさば終業式』では、「せがれが大変お世話になりました……」と両親が担任の先生に深々と頭を下げる光景もなければ、卒業する女の子が目を潤ませて学園を巣立つ感傷にひたる姿もみられなかった。子どもも両親も、そして先生も、話といえばヴァカンスのことばかり。父兄の中には、ささやかな感謝の意をこめて担任の先生に小さな包みを渡す人もいたが、息子に聞くと中身はチョコレートかポンポンだという。

『12の瞳で見たドイツ 古都ケルン・子連れ生活日記』p. 96より

(三輪晴啓 PHP研究所 昭和54年)

同じ年の9月、明子は上級国民学校の6年生から7年生に進級し、雅啓は初級国民学校の4年生を終えて、姉の通う上級国民学校の5年生に進んだ。初級国民学校に新入学した健啓たちの「入学式」がなかったのと同様、雅啓たちの「卒業式」も行なわれなかった。わずかに、最後の授業時間にクラスルームで、ジュースやケーキによる「お別れの会」が開

かれただけだという。

『ニューヨーク郊外の学校で 息子たちの体験から』p. 127 より

(飯泉美耶子 朝日ソノラマ 昭和56年)

ミドルアイランド中央学区では、8年生で中学校は終わりである。だが卒業式などない。その代わり、というわけではないだろうが、卒業記念ダンスパーティーが開かれる。

このパーティーには、特別の意味がある。

この日、初めて男の子たちは、一人前の男性として女の子を誘って、正式のダンスパーティーに出席するのである。少し早いが、これで大人の仲間入り、という自覚をちょっぴり味わわされる行事なのだ。

『アラブニューヨーク 千の顔を持つ世界の秘境』p. 57より

(黒田英雄 東洋経済新報社 昭和57年)

\*面白いのは卒業式である。

広い運動場に借り物の帽子とガウンを着用して整列、一人一人卒業証書を貰うが、名前を呼ばれると観覧席の一派郎党が口笛を吹き、靴を鳴らし、奇声を発し、にぎやかなこと。終るといっせいに帽子を空中に放り上げる。講堂で右総代が証書を貰い、螢の光に鼻水をする日本の方とは全く趣を異にし、誠に明朗にして陽気、確かに卒業式というよりは新しい人生の始業 commencement exercises というふざわしい雰囲気である。

\*公立中学校

『アメリカの高校生 イリノイ州セントラリア高校のすべて』p. 134 より

(山 規男 三修社 昭和58年)

—「それでは今度は卒業式について話してほしいんだけど、まず、いつ行われたの？」

竹内「6月の6日でした。夜の8時頃から体育馆で行われました。この時もずいぶんたくさん的人が集まりました。」

—「まさか入場料はとらないんだろうね。」

竹内「それがとるんですよ。もちろん自分の娘や息子が卒業生である親や兄弟なんかは無料ですが、そうでない人は入場料が必要です。私の場合は、むこうの“姉妹”のデニースが卒業生であったからいりませんでした。」

—「卒業生の服装なんかはどうなの？」

竹内「男女とも、ひものついた角帽をかぶり、カウンを着ます。どちらもスクールカラーの赤で独得の雰囲気でした。みんな卒業の記念に帽子についているひもだけは大事に残しておくそうです。」

—「それでは、卒業式の様子を簡単に聞かせて下さい。」

竹内「はい。まず、バンドの演奏する“威風堂々”に合わせて卒業生が入場します。全員の入場が終わると、牧師さんのお祈りがあり、そのあと、4年生の生徒会長の挨拶がありました。そして、聖歌隊が2曲ほど歌い、つづいて校長先生の祝辞がありました。そしてこのあと、1人ずつの名前が呼びあげられて、教育長から卒業証書が渡されました。名前を呼ばれた時には、観覧席にいる父兄もいっしょに立つんです。それから卒業証書をもらう時には、みんな握手をしていました。また、この時に、成績優秀者や4年間1度も休まなかった人達が表彰され、首か

らひもみたいなものをかけてもらっていました。そして、最後に牧師さんの感謝の祈りがあって式が終りました。」

—「日本とよく似ているようにも思うけどどうなの？」

竹内「同じようなことをやっているのですが、感じはずいぶんちがいました。日本では卒業式というと立ったり座ったり、それに「一同礼！」とか言って何度もお礼をしますね。ああいうことが全くありませんし、来賓の挨拶もありませんでした。それから、式が終ると卒業生の間から歓声がわきあがりました。全体に明るい感じで、卒業式をコメントメント（Commentement=始まり）という意味がわかるような気がしました。」

—「別れを惜しむというよりも、出発を祝うという感じ？」

竹内「本当にそんな感じでした。」

それぞれの国にはそれぞれの文化や歴史的背景があり、人びとの気質や考え方も違う以上、こうした海外の卒業式のあり方と日本のそれとが違っていても、別に不思議ではないだろう。しかしそれにしても、明治時代からのスタイルのほとんどを纏綿と受け継いでいるかのような、現在の日本の小学校の卒業式のあり方は、もう少しなんとかならないものか。またはもう少しなんとかしなくてよいものだろうか。そうした問題意識の下で今回の全国調査が企図された。これら海外の卒業式のハピイで明るい情景を心の片隅に止めながら、以下、わが国の卒業式について行われた調査レポートをお読みいただければと思う。

# 調査レポート／卒業式（全国調査）

## 要 約



### ①調査の意図

日本の卒業式は、欧米と比べるとかなり特異である。おそらくそのパターンは、明治以降、一部の手直し（たとえば「よびかけ」の導入）がされた以外ほとんど変わっていないのではないか。しかし、大きくはないが、細長い日本の国である。地域によっては変わった卒業式もあるかもしれない。卒業式が、ただ明治以来の伝統を踏襲するだけでよいのかを考えてるために、この全国調査を企画した。



### ②欧米の卒業式と全く違う

海外事情を描いた最近の刊行物によれば、日本の卒業式に近い形は、多少とも欧米の中学校や高校に見られる（ガウンの着用や証書授与、校長の訓話など）場合もあるが、その雰囲気は全く違っており、特に小学校段階で、このような式をしている国は、筆者らの集めた資料からは全く見いだされなかった。



### ③卒業式の決まったパターン

「一同敬礼(88%)、君が代(74%)、校歌(97%)、一人ひとりに(100%)校長が手渡す(100%)証書授与、校長式辞、来賓祝辞、記念品授与、螢の光(48%)、仰げば尊し(45%)、よびかけ(91%)」が、現在の日本のはとんどの学校の卒業式の構成要素である。（資料2、図9、図10、図11）

東京学芸大学助教授 深谷和子

東京都目黒区立菅刈小学校教諭 土橋 稔

千葉県船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠

千葉県千葉市立平山小学校教諭 広森 滋

#### ④卒業式の会場

ほとんどの学校で体育館(80%)か講堂(17%)を使用、日の丸(91%)と校旗(97%)を飾り、紅白幕を用い(52%)、大きな生け花を置く(90%)。  
(図3)



#### ⑤来賓の中には議員も

全校生徒が参加する卒業式は、小規模校を中心に、全体で58%。PTA会長(96%)、PTA役員(83%)、教育委員会関係者(82%)のほか、議員(69%)、地元の名士(57%)などの参加する学校もある。来賓のあいさつは2~3人が多く、PTA会長(90%)と教育委員会関係者(74%)が中心だが、議員(30%)や地元の名士(12%)のあいさつする学校もある。議員は参加しないまでも、祝電をよこす(51%)ケースも多い。しかし、学校は政治と一定の距離を置くべきであり、学校側は、(たとえ善意からにせよ)議員の参加を断るべきではなかろうか。

(図4、図5、図6、図7)



#### ⑥衣食足りて礼節の現代を反映

校長は98%が礼服、6年担任(男性)も、73%が礼服であり、世はまさに礼節を重んじる時代になっているのだろう。卒業生は、中学校の制服が4割を越え、標準服のところも2割強。ふだん着の卒業式は1割でしかない。(図8)



## 調査レポート／卒業式（全国調査）

### 要 約



#### ⑦重くしめた卒業式

式の途中で泣いていた子のいないカラッとした卒業式はわずか15%、式全体の雰囲気を大なり小なり「伝統的な雰囲気」とした学校は3分の2。（図13、図14）



#### ⑧話し合いは必要がない？

毎年決まったパターンで行われるためか、事前の職員会の話し合いは、1～2回が3分の2。内容は（「とても・わりと話し合われた」割合）よびかけの内容（59%）、会場の装飾（37%）、証書授与の形（32%）で、他は微々たるものでしかない。全体に関するつっこんだ論議の行われている気配は少ない。（図17、図18）



#### ⑨かたちの練習に力を入れる

3月に入って準備を始めた学校が8割、体育馆を使用して本格的に練習をはじめるのが1週間（40%）か2週間（29%）前である。（図20）また、練習で一番力を入れたのは「証書授与、歌、返事の仕方」であるが、これらの指導に、はたしてどのくらい意味があるのだろうか。（図21）

### 調査概要

- 1.調査主題 卒業式
- 2.調査視点 「卒業式」についての意識、進行状況、

地域特性を探る。卒業式の目的と、これからの方  
向について調査する。

- 3.調査項目 卒業式の実施期間／卒業式の内容につ  
いて／卒業式の服装について／卒業式の練習のよ  
うす／卒業式をふり返って

## ⑩昨年と比べて

昨年の卒業式と比べて部分的にせよ変化したのは、「よびかけの内容」(54%)で、ついで「入退場の曲」(39%)、「会場の装飾」(28%)、「証書授与の形」(25%)で、他はほとんど変化がない。(図22)



## ⑪学校側はほぼ満足

昨年行われた卒業式に、多少にせよ不満だったと答えた者は、5%に過ぎない。(図23)しかしこうしたパターンの卒業式に、こんなに満足していくいいものだろうか。はたしてかんじんの子どもたちには、どう受け止められているのだろう。(図23)



## ⑫終わりに

卒業式はもっと多様であってもいいのではないかろうか。歴史の流れがどこかで止まったような卒業式が、日本全国で一様に行われているのはなぜだろうか。これはひょっとすると、日本の学校が全体として、年をとり、くたびれ果ててしまったことの表れではなかろうか。学校に、すなわち教員集団に、社会のどこよりも、若さと活気のあふれた場であることを期待してはいけないのだろうか。

最後に、現行の卒業式の活性化のために、いくつかの提言を試みた。



4. 調査時期 昭和61年4月～6月

5. 調査対象 調査対象校の教務主任または担当教員

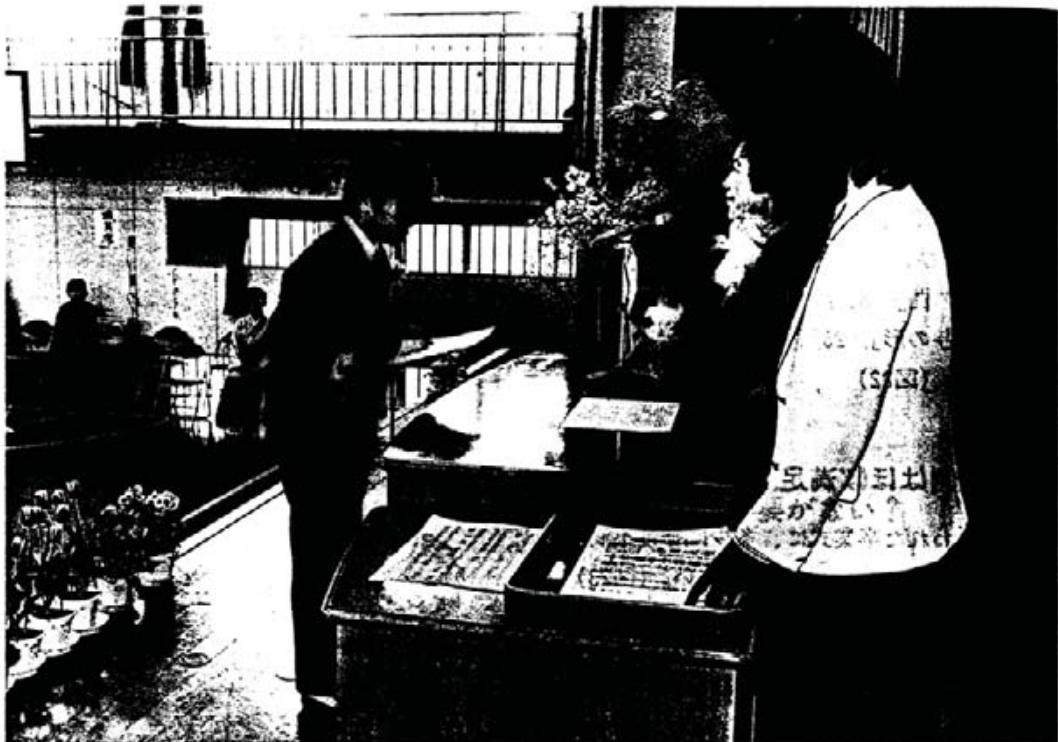
6. 調査方法 小学校へ質問紙を郵送

7. サンプル 全国の小学校より10分の1の抽出で2500

校を選び、調査票を送付した。

有効サンプルは866校、回収率は34.6%。

# 1. これが日本の卒業式



3月20日（木曜日）午前10時30分、卒業式が始まった。卒業生は胸にリボンをつけ、祝福の拍手を受けながら、音楽に合わせて静かに入場する。

会場の正面には日の丸、まわりには紅白幕が、演台の横には校旗が立てられ、大きな生け花が飾られている。出席者は卒業生と卒業生父母、1年から5年までの在校生、来賓と教職員。

一同敬礼で式は始まる。続いて君が代斎唱。卒業証書授与では、児童一人ひとりが校長から証書を手渡される。そして校長の話、教育委員会、来賓の祝辞が続き、最後に卒業生と在校生とのよびかけが行われる。「螢の光」「仰げば尊し」なども歌われ、おごそかな雰囲気の中に式は終わる。時刻は12時。開式から1時間30分が経過した。

この日までに子どもたちが式の練習に使っ

た時間は、約7時間。前日には予行練習も行われた。また、計画段階での教師の話し合いは、職員会議で1～2回、総計2時間程度であった。終わってみて、わりと満足しているというのが大かたの教師の感想である。

以上は、60年3月の時点での日本の卒業式の平均的プロフィールを調査データから描いてみたものだが、次に、得られた数値をより詳細に見ていくことにしよう。

なお、調査方法は、全国約2,500の小学校のうち、学校名簿を用いて10分の1の無作為抽出を行い、得られた回答数は866校分（回収率35%）。調査校のプロフィールは図1に示した通りで、調査用紙の記入者は各学校の教務主任、または卒業式担当学年の教師であった。調査時期は、昭和61年4月～6月。（すなわち、本レポートのデータは昭和60年度の卒業式に関するものである）

## 式次第をめぐって

まず、卒業式全体が、どんなプログラムで行われているかを見てみよう。巻末の資料1・⑩は、本調査に寄せられた当日の式次第の中から、多少特色のあるものを抜き出してみたものだ。しかし、よほど注意して見ないと、どこに特色があるのか弁別がむずかしい。一応他と違っている部分に○をつけ、小見出しを入れておいたが、それがなければほとんどが同じに

見える。全体が、おどろくほど似かよっていることがわかるだろう。

卒業式のイメージを描くために、その中でもかなり詳細に進行が決められた式次第の例を掲げた。「敬礼、君が代、校歌、証書授与、校長式辞、来賓祝辞、記念品授与、螢の光、仰げば尊し、よびかけ」は大かたの卒業式の構成要素だが、これにせいぜい「保護者代表

図1 調査校のプロフィール

	大都市	中小都市	農・漁村	(%)
所 在 地	9.7	33.3	57.0	
学区のようす	住宅地域 32.0 商業地域 6.2 農林水産地域 60.3 工業地域 1.5			
保護者の職業	サラリーマンが大部分 54.7	自営業が大部分 40.5	農業・水産業が大部分 4.8	
学校規模	6学級以下 37.2	7~18学級 38.4	19学級以上 24.4	
全校の児童数	1~99人 23.0	100~299人 27.8	300~799人 35.2	800人以上 14.0
創立何年目か	10年未満 16.5	10~40年 5.9	41~70年 18.7	71~100年 51.7

謝辞、卒業生自己紹介、賞状授与、キャンドルサービス、市歌、タイムカプセル」が加えられている程度の変化しかるべきは、どうしたわけか。

しかし例年きまりきったスタイルをとると

はいえ、これらを整然と進行させるためには、よほど入念な台本がなければならないだろう。事実、多くの学校から、ワラ半紙数枚をとした「卒業式台本」を送っていただいた。その一例に、北海道のA小学校の台本を以下に紹

### 昭和60年度 卒業証書授与式 式次第細案

入 場	9:15 在校生入場 9:25 来賓入場 9:30 卒業生入場 BGM 第九シンホニー 各列ごとに着席する。	保護者は、来校順に式場に入る。 職員は、在校生の直後に入場する。 ドア係……(○野) とともに担任が誘導する。 全員の拍手で迎える。
一 同 敬 礼	「一同起立」	「一同敬礼」
開式のことば	「開式のことば」 授与式を行います。(教頭)	「ただいまから、昭和60年度卒業証書 全員起立のまま
君が代齊唱	「君が代齊唱」 「着席」	伴奏……(○川) 指揮……(○浪)
卒業証書授与	「卒業証書授与」 「昭和60年度卒業生6年1組 ○崎○太・・・」 先頭 階段から演壇へ 校長 証書読み 以下1名1名に渡す BGM (ビバルディー 四季) 「2組 ○津○子・・・以上78名」(担任) 校長そのまま壇上に残る。 証書渡し補助……(○井)	校長登壇(証書は演壇へあらかじめ用意) (担任) 以下1名1名に渡す 校長 証書読み 以下1名1名に渡す BGM (ビバルディー 四季) 校長そのまま壇上に残る。 証書渡し補助……(○井)
学 校 長 式 辞	「学校長式辞」 「礼」 座礼 校長 励ましのことば 「礼」 座礼	校長 励ましのことば 校長 そのまま壇上に残る。
学校記念品授与	「学校記念品授与」 「卒業生 起立」 総代 ○本○久 総代 記念品を受け取って降壇 校長 総代が席について降壇 校長降壇してから「着席」	総代 記念品を受け取って降壇 校長 総代が席について降壇 校長降壇してから「着席」
PTA記念品授与 並びに 会長あいさつ	「PTA記念品授与 並びに 会長あいさつ」 「卒業生 起立」 会長 登壇 会長が演壇に立ってから 「総代 ○岩○美」 総代 登壇し記念品を受け取って降壇 会長 そのまま立っている。 「卒業生 着席」 会長 あいさつを述べる。 「礼」 座礼 会長 降壇	会長 あいさつを述べる。 「礼」 座礼 会長 降壇
卒業記念品 目録贈呈	「卒業記念品 目録贈呈」 「卒業生・在校生 起立」 校長 登壇 「総代 ○井○二」 礼をして読み上げる。 総代が目録を校長へ手渡すとき「礼」 校長 降壇 「着席」	校長 登壇 「総代 ○井○二」 礼をして読み上げる。 総代が目録を校長へ手渡すとき「礼」 校長 降壇 「着席」
教育委員会告辭	「教育委員会告辭」 教育委員 登壇 「礼」 座礼 告辭が終わって 「礼」 座礼 教育委員 降壇	教育委員 登壇 「礼」 座礼 教育委員 降壇

介しておきたい(一部分省略)。巻末に、「ねらい」があり、分割みの時刻表と係の分担があり、準備のための日程表があり、当日の詳細な進行表がのっている資料1・⑪があるので、あわせて参照されたい。

こうした卒業式をどう見るかは、それぞれの読者に任せたいが、少なくとも、もっといろいろあっていいのではないかという感想は否めない。どうしてもっと多様化しないのか、われわれにはそれが不思議でならない。

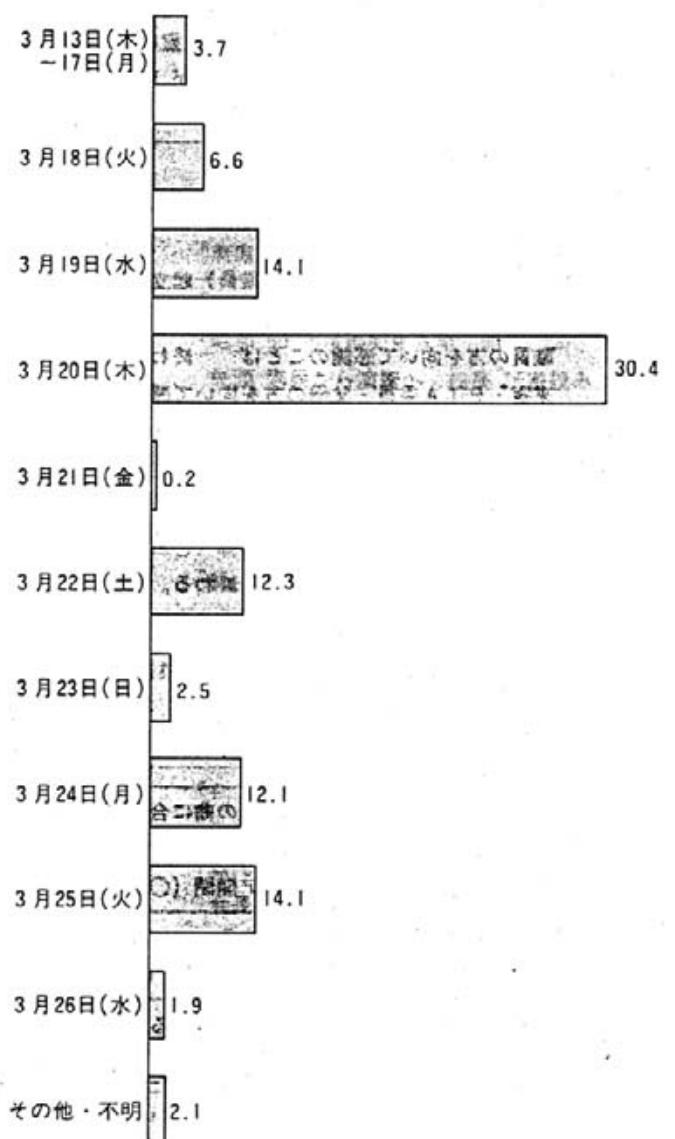
来賓祝辞	「来賓祝辞」 「南○○町長殿」 町代表 登壇 「礼」 座礼 祝辞が終わって 「礼」 座礼 町代表 降壇 「南○○町議会 代表殿」 議会代表 登壇 「礼」 座礼 祝辞が終わって 「礼」 座礼 議会代表 降壇
来賓紹介	祝辞を述べない来賓を紹介する。(教頭)
祝電披露	「祝電を披露させていただきます。(児童に関係のあるものだけ披露する)他にも参っておりますが、廊下に張ってありますので、御覧ください。」(教頭)
卒業生・在校生のことば	「卒業生・在校生のことば」 最初の「卒業」で卒業生全員起立し、順次、卒業のことばを述べていく。 「歌いましょう」で(在校生・職員)起立。 校歌齊唱 伴奏(○川) 指揮(○浪) 職員の方を向いて感謝のことば 終わって(職員)着席 来賓・PTA委員・父母の方を向いて感謝のことば 在校生の方を向いて 在校生へのことば 在校生から卒業生へのことば 終わって(職員)起立 卒業生正面を向いて 別れのことば 卒業生の歌 伴奏(○川) 指揮(○浪) 「別れの歌」「ほたるの光」で終わる。
閉会のことば	「一同起立」「閉式のことば」 「これをもちまして、昭和60年度卒業証書授与式を終わります。」(教頭)
一同敬礼	「一同敬礼」「着席」
卒業生退場	「卒業生退場」拍手とほたるの光の曲に合わせて 1組から退場。 BGM操作(○川) ドア開閉(○野)
退場	来賓退場………教頭が案内する。 在校生 4年1組から退場 (記念品を6年教室へ運ぶ)
6年担任あいさつ	学年主任が代表で、簡単にあいさつする。
卒業生見送り	玄関前から正門まで、5年—4年の順に、1組北側、2組南側に各1列に並ぶ。「ほたるの光」はレコードによる。 低学年は、式の前にあいさつして下校しているのでいない。

## 会場のようす

まず図2は、卒業式の行われた日をみたものである。3月20日が一番多く、30%の学校で、あとはほとんどが19日から25日までに行われている。しかし、早い学校は3月13日、遅い学校は3月26日と、その開きは2週間もある。

卒業式の会場は、ほとんどの学校で体育館または講堂を使用（図3）。86%の学校で、壁に日の丸を飾り、校旗は旗立台に80%が、そして、90%の学校で大

図2 卒業式の行われた日



きな生け花を用意している。市町村旗は約3分の1の学校で使用し、会場に紅白幕を使っているところも約半数である。

参加学年を見ると(図4)、6年生だけではなく、全校児童で卒業を祝うのが、一般的なスタイルだ。しかし、18学級以上ある大規模校では、スペースの関係上、5年生を在校生の代表とした、5、6年生による卒業式を余儀なくされているようすもみられる。

次に図5は、卒業式への招待客である。PTA会長(96%)、PTA役員(83%)、教育委員会関係者(82%)はほとんどの学校で招いており、議員(69%)、地元の名士(57%)、中学校の校長(63%)などをよぶところも多い。

また人数も(表1)、大規模校、中規模校で11人~20人。小規模校ではこれより少ない。本調査の一校の平均卒業生75人に対し、平均来賓数が16人。児童約5人に1人の割合で、

図3 卒業式の会場

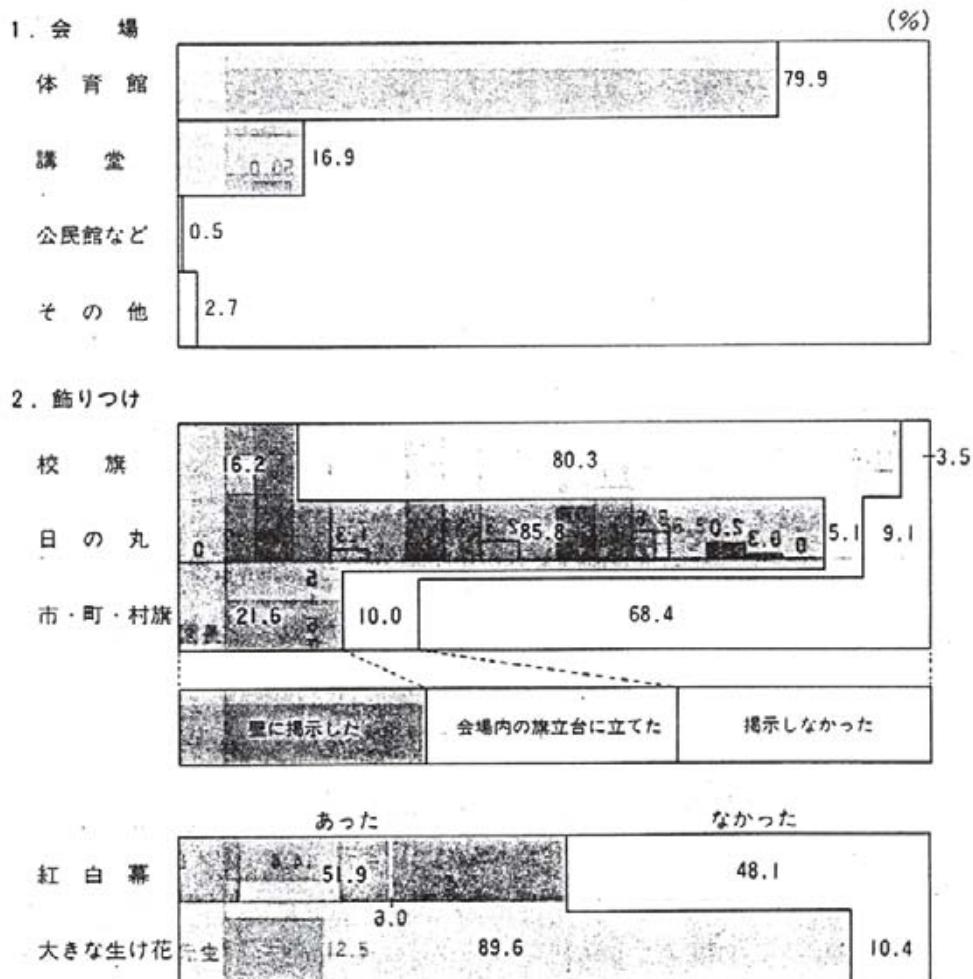


図4 参加学年×学校規模

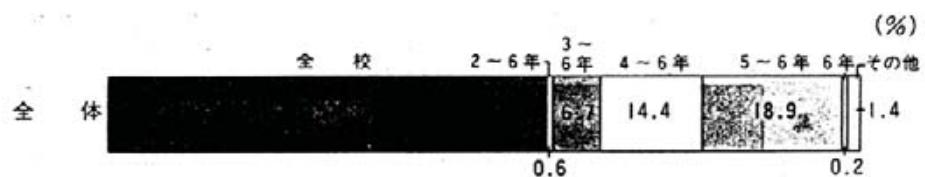
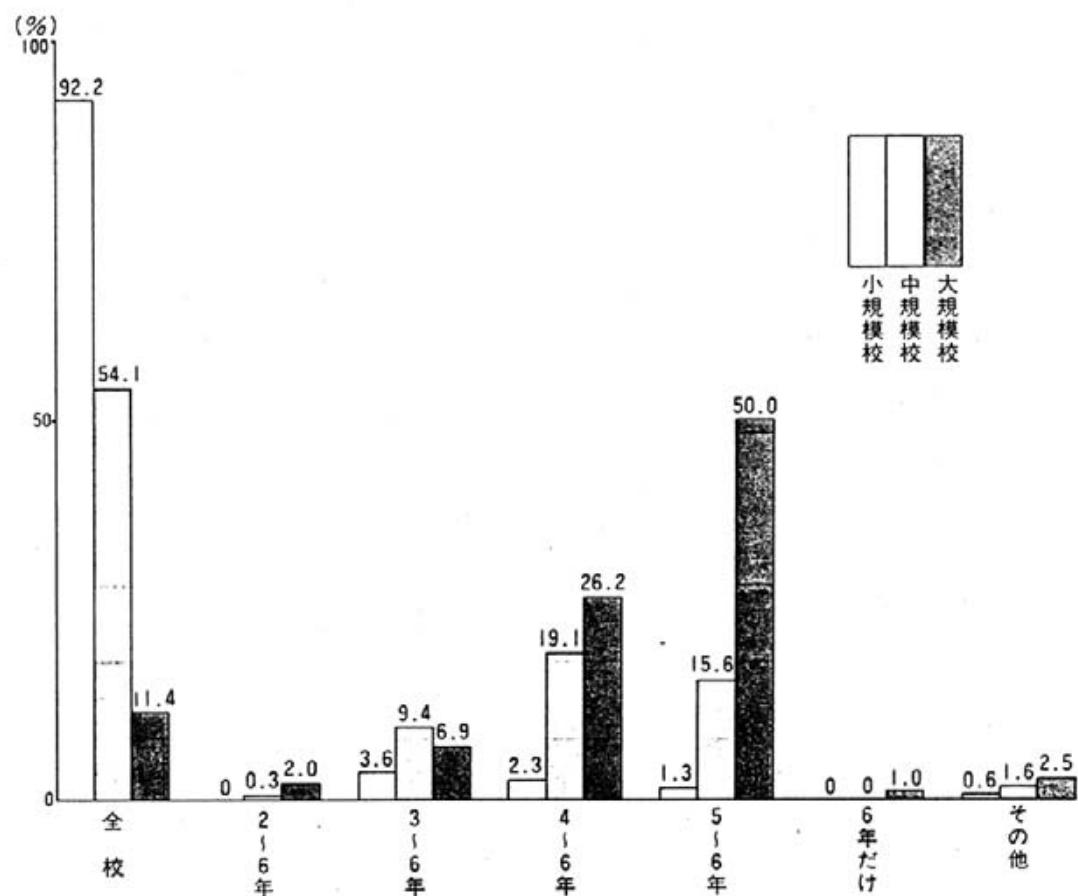
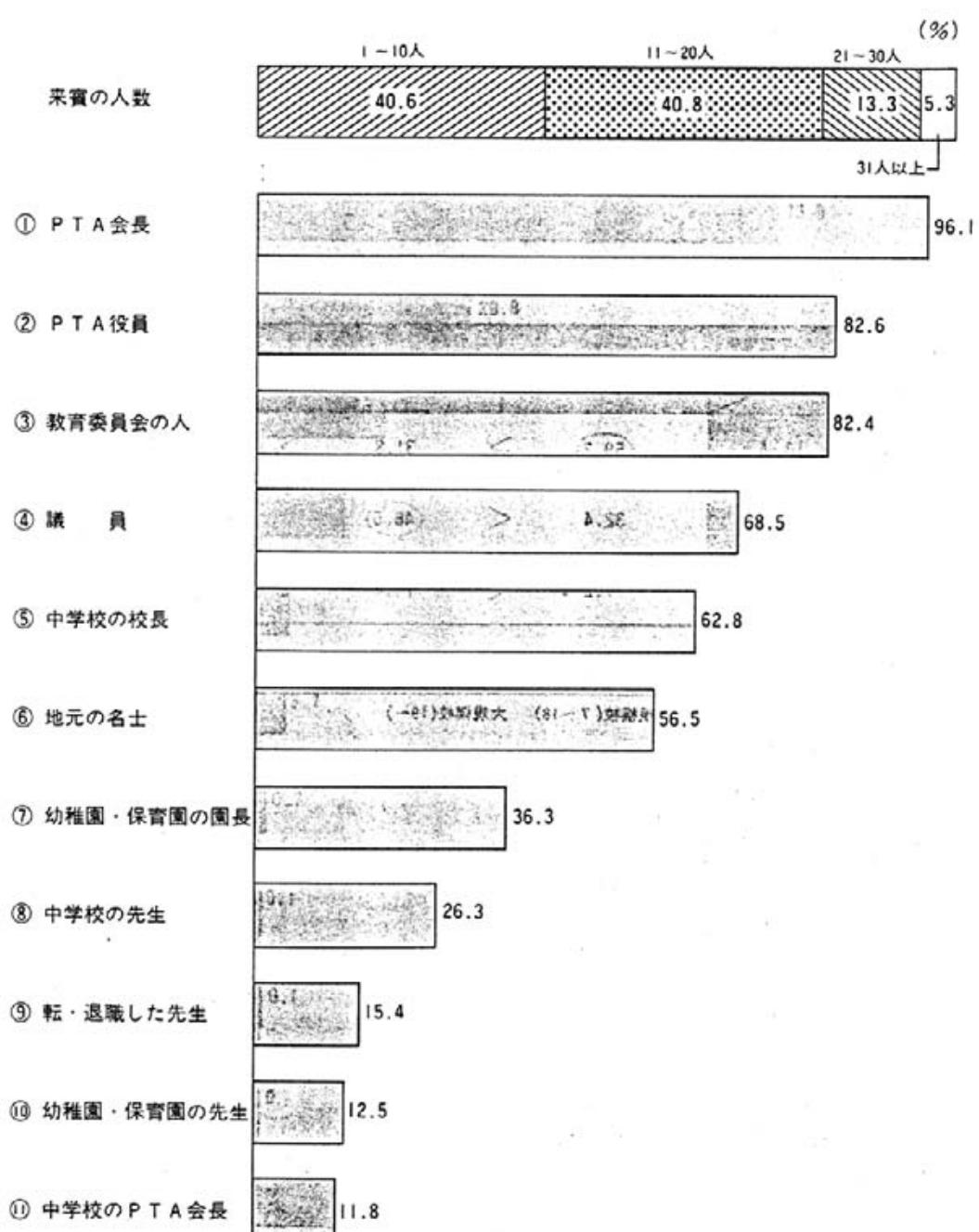


図5 来賓



来賓が招かれている。

その中で、あいさつした来賓は（図6）、3人が一番多くて約4割。また表2に示したように、大規模校になるほど、あいさつした来賓の数は少ない。また、寄せられた祝電については、図7に示したとおりである。

また、卒業式の服装については（図8）、校長はほとんど礼服（98%）、6年担任の男

性教諭は73%が礼服、女性担任の中には和服も4分の1程度いる。たぶんはかまだろう。また卒業生も、中学校で着る制服が一番多くて、男女共4割を越す。小学校の卒業式に、なぜ中学校の制服なのか、不思議な感覚だ。ともあれふだん着の子は1割ほどしかいない。儀式ばった卒業式の雰囲気が、ここからもうかがえる。

表1 来賓×学校規模\*

(%)

学校規模	小規模校	中規模校	大規模校
来賓の人数			
1～10人	(59.2) >	31.8 >	23.9
11～20人	32.4 <	(46.5)	(46.0)
21～30人	7.2 <	14.4 <	22.7
31人以上	1.2 <	7.3	7.4

\* 小規模校(学級数1～6) 中規模校(7～18) 大規模校(19～)

図6 あいさつした来賓

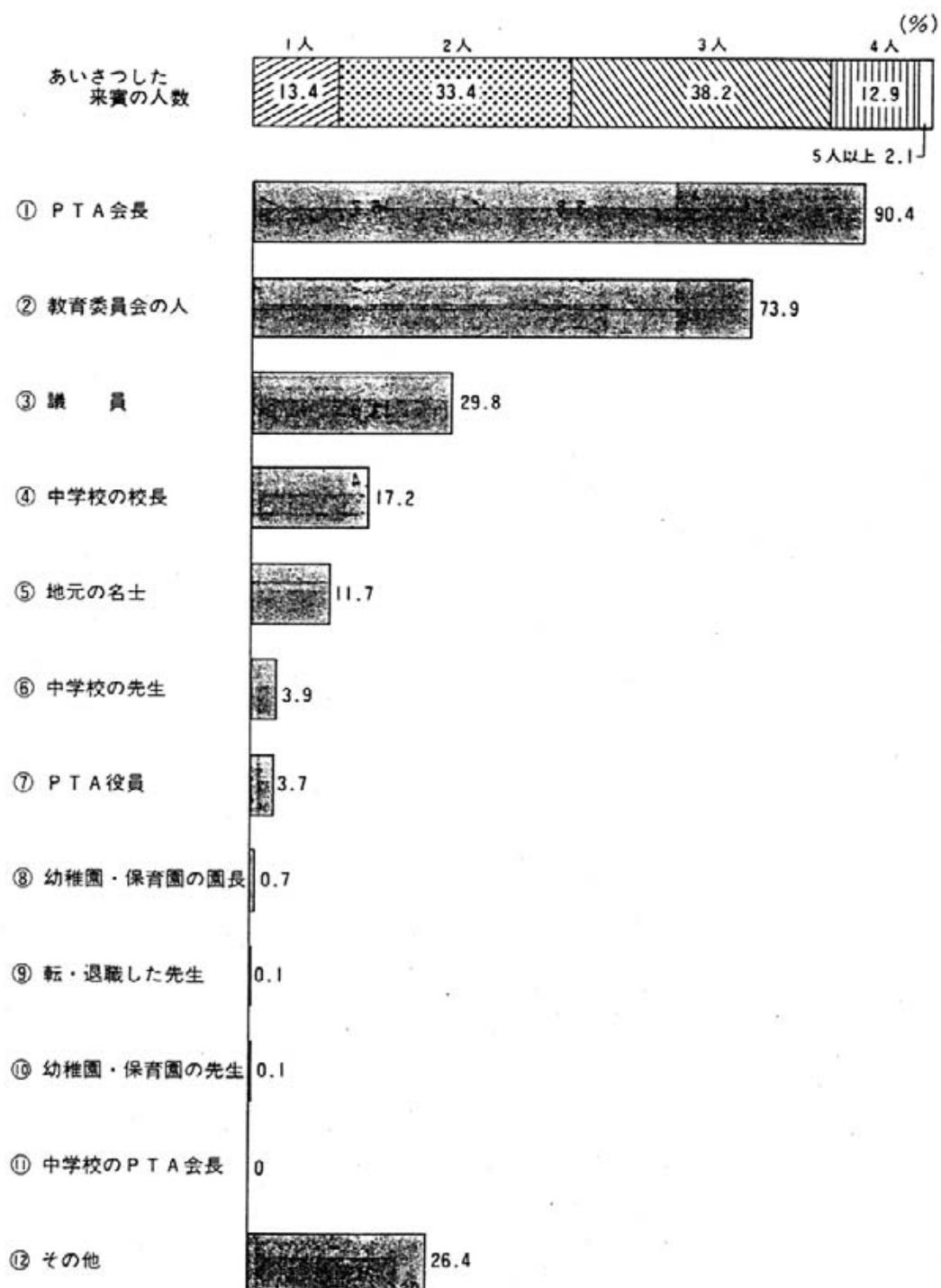


表2 あいさつした来賓×学校規模

(%)

学校規模 上人數	小規模校	中規模校	大規模校
1人	3.8 < 15.7 < 21.4		
2人	26.7 < (37.0) (38.3)		
3人	(49.0) > 33.5 > 30.5		
4人	16.7 > 13.0 > 7.8		
5人	2.9 0.4 1.3		
6人	0.5 0 0.6		
7人	0 0 0		
8人	0.5 0.4 0		

図7 祝電

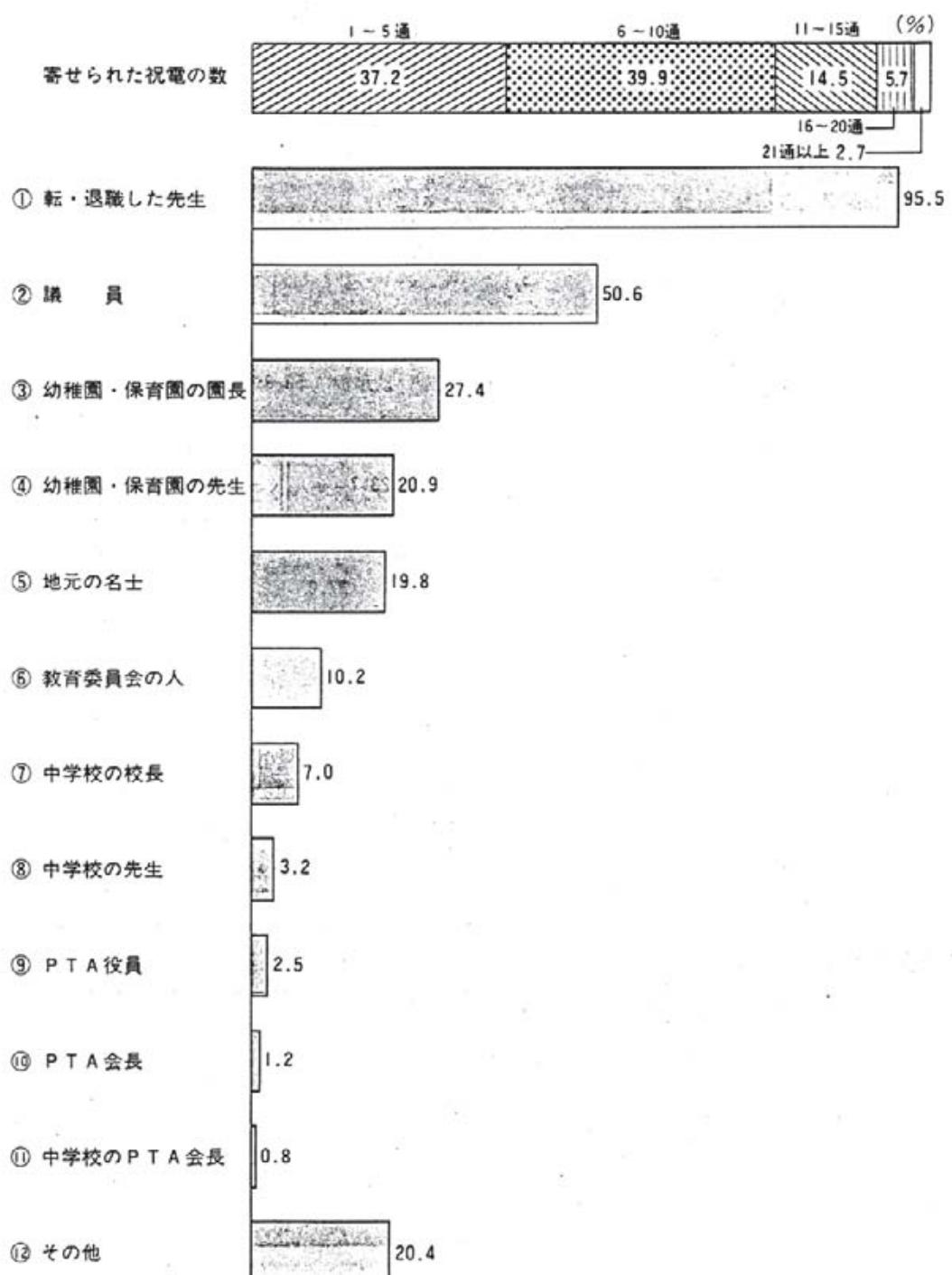
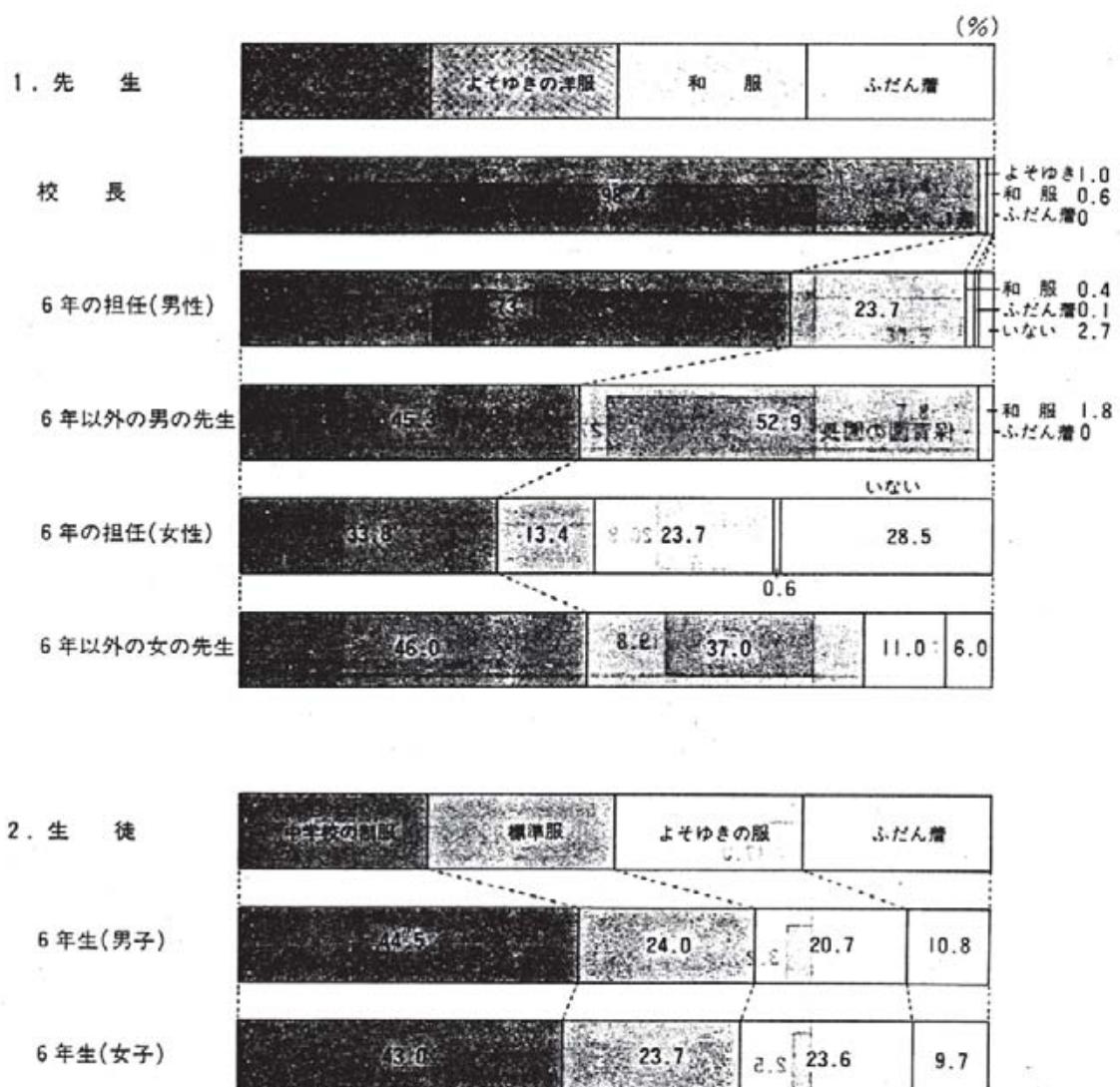


図8 卒業式の服装



## クライのがお好き？

卒業式は、正確には卒業証書授与式だが、その授与の方法をみたものが図9である。証書は、担任が(90%)児童一人ひとりの名を呼び(99%)、校長が(100%)一人ひとりに(100%)手渡す。このパターンはこわいほど同じだが、その際に、校長が児童に声をかけたり、児童が壇上で決意を述べたりと、多少の工夫をしている学校もあるようだ。(資料1・①)

次に図10は、卒業式で歌われた歌である。式の中では3~4曲が歌われ、校歌はほとんどの学校で、また君が代も74%の学校で、さらに「螢の光」「仰げば尊し」などの伝統的な卒業式の歌も、半数近くの学校で歌われている。しかし、むろん、新しい歌が加わっていらないわけではない。6割の学校では、資料

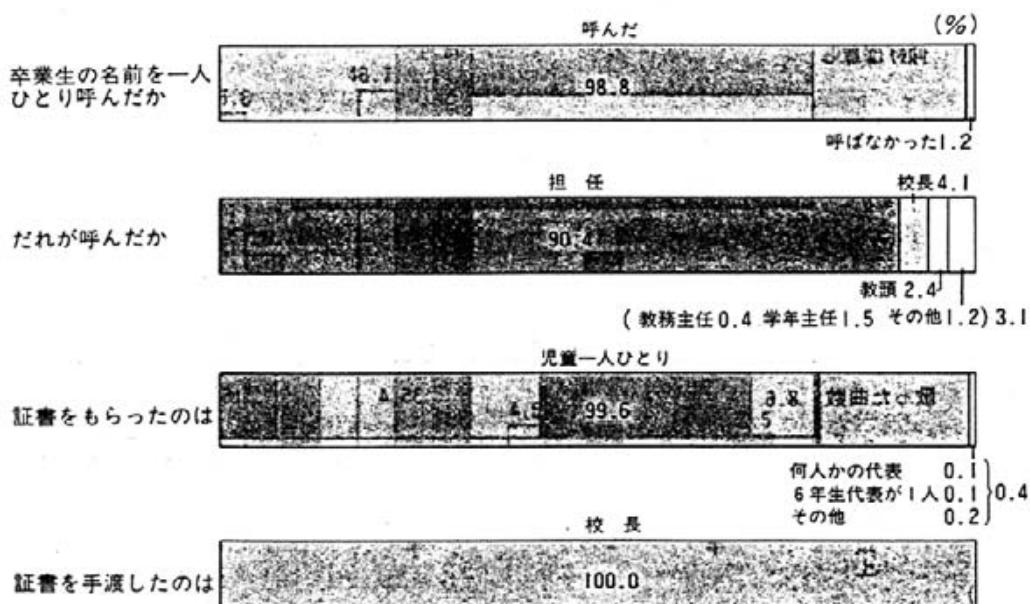
1・②に掲げたような曲を加えている。

卒業式の最後は別れの言葉である。かつての送辞、答辭にかわって、子どもたちによるよびかけの形式をとっている学校が85%(図11)。父母、教師と子どもの三者によるよびかけが7%。これに対して、昔風に送辞・答辭を行っている学校は、全体の中で29校、3%。

つづいて図12は、卒業式に要した時間で、1時間30分が標準時間であり、1時間ですましているところも小規模校中心に約3割。全体の85%が1時間半以内ということは、このあたりが式のおごそかさを保つぎりぎりの限界なのかもしれない。むろん大規模校では、若干長くなっている。

最後に、式全体のイメージをたずねたもの

図9 証書授与の方法



が、図13である。「新しい感じ」と答えた学校はわずか6%。「どちらかといえば」を加えても、新しい感じの卒業式をしている学校は2割でしかない。明治以来の、おごそかな、——つまり今風に表現すれば、「暗い」卒業式を好む学校が7割にものぼっている。したがって、図14に示したように、多くの卒業式に、子どもたちの「泣き」が入っている。涙のないカラッとした卒業式は15%でしかない。

これと関連したデータが図15だ。卒業式に

テーマを設けている学校は、わずか15%。資料1・③にその例を示したが、どれも明るく前向きだ。ということは、多くの学校でテーマを設けないのは、「涙」というテーマを追い出すようなことは、したくないためにか、とも思ってしまう。

なお、会場の設営のしかた、卒業生の入場のしかた、会場に流された曲、会場の装飾などの資料は巻末に掲げたが(資料1・④～資料1・⑧)、これについてはあとでふれたい。

図10 卒業式で歌った歌

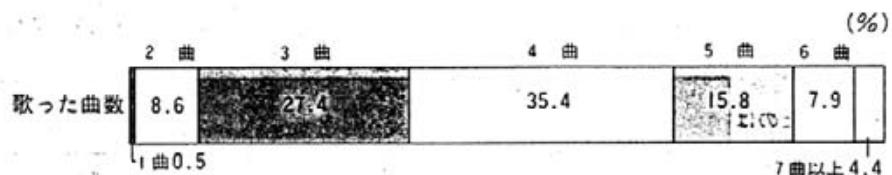
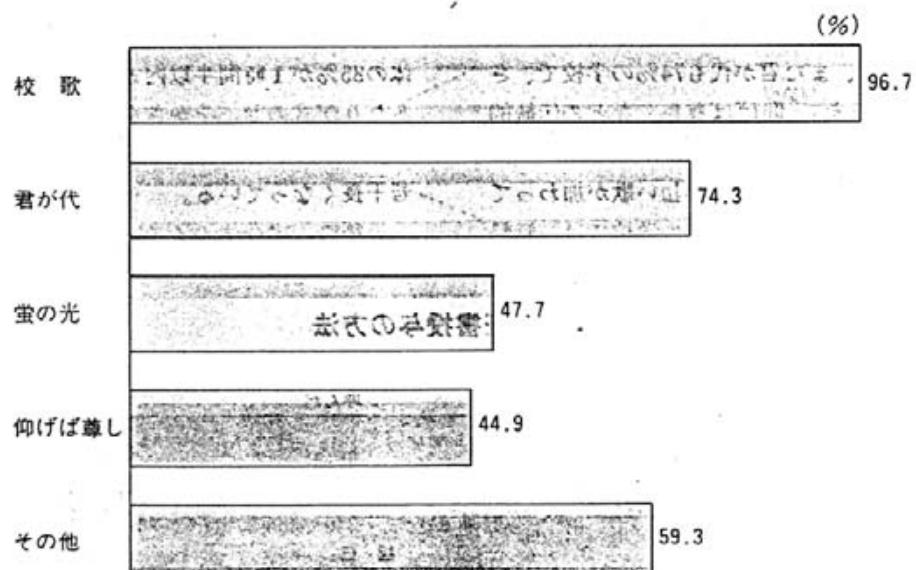


図11 別れのことば

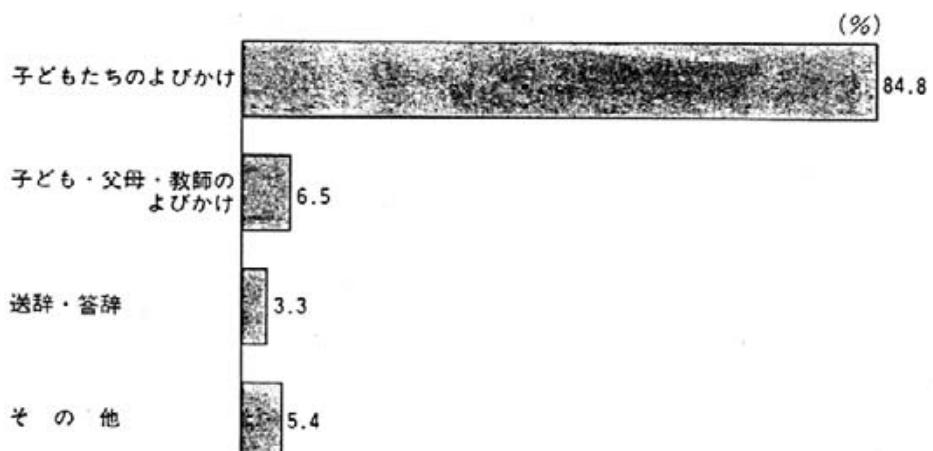


図12 卒業式に要した時間×学校規模

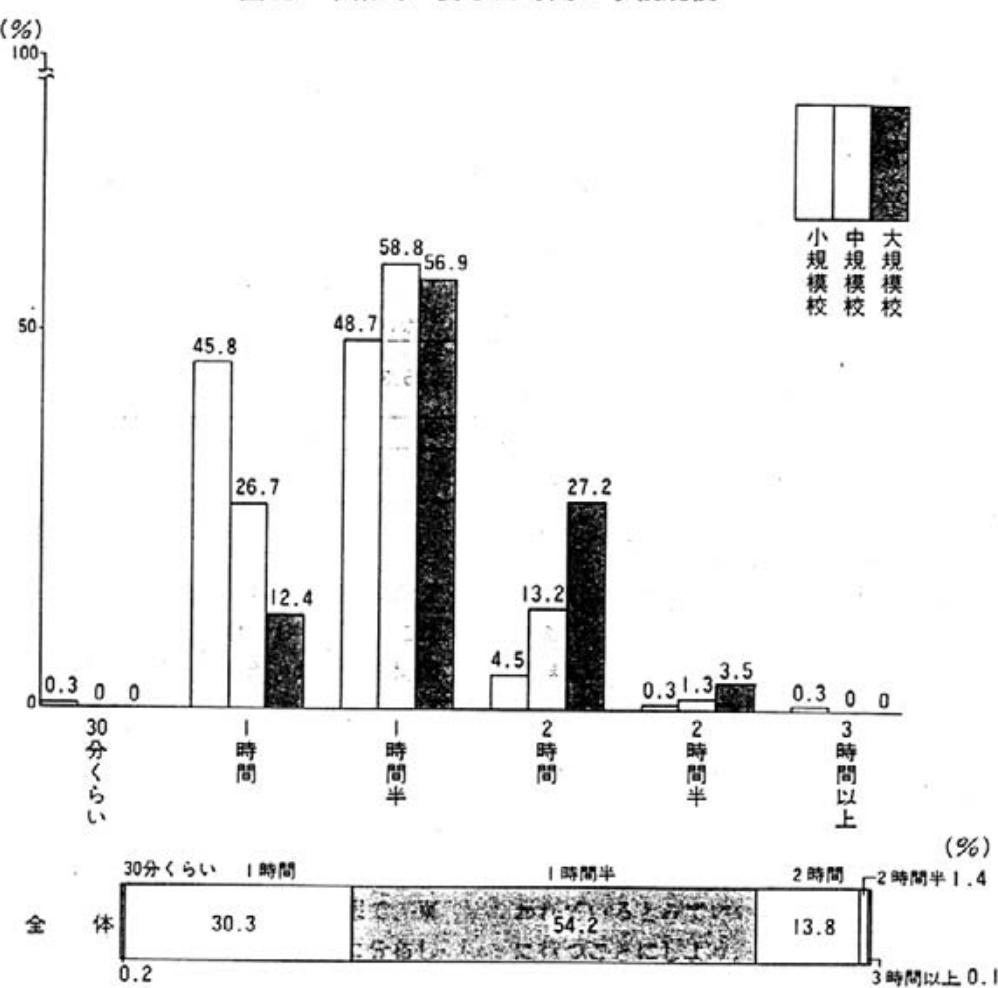


図13 式の全体の雰囲気は

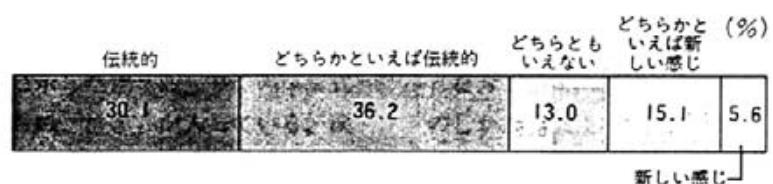


図14 式の最中に泣いていた子は

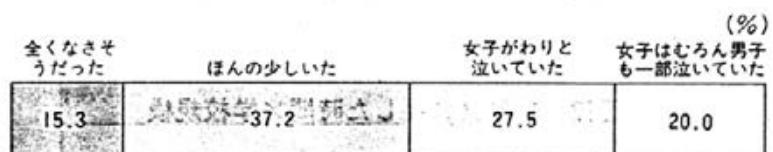
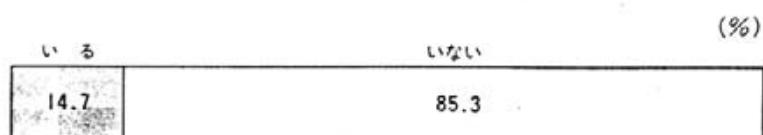


図15 卒業式にテーマを設けている



## 2. 各地の卒業式



1章では、全国の小学校の卒業式のようすを概観した。2章では県別データを基に、地域差に目を向け、各地の卒業式のようすを探

ってみることにする。なお県別の調査協力校数は地図1のとおりである。

### 卒業生の服装

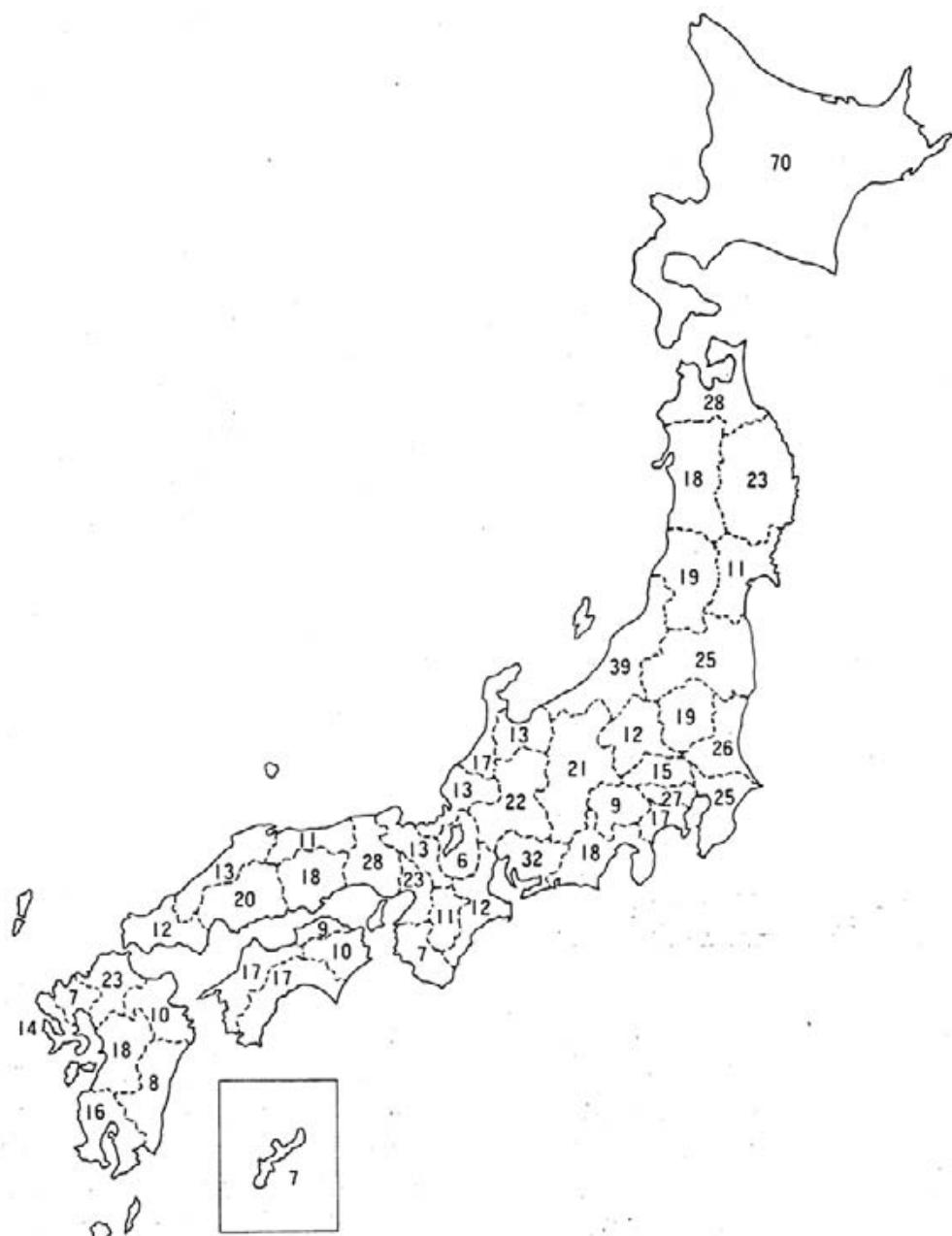
卒業生の服装に、全体として自由度が少ないことは、すでに見てきたとおりだが、これを男女別に県ごとに見たのが、地図2と地図3である。図が示すように、卒業生の服装は、大きく3つの地域に分けられる。ひとつは、中学校の制服が主流を占める地域で、東日本全域にわたっている。もうひとつは、標準服が主流の地域で、奈良県以西の西日本に広がっている。そして最後のひとつが私服で、東海地方・近畿の一部など、大都市圏に分布している。これは何を意味するのだろう。

これに関連させて、地域を「大都市」「中小都市」「農漁村」に分けてみると、表3と表4に示したように、「中学の制服」で式に参加するのは農漁村に多く、「よそゆきの服」は大都市のほうが多くなっている。昔だったら経済レベルの差とみることもできたろうが、今では必ずしもそうではないだろう。卒業式の雰囲気（伝統的カリベラルか）がここに表われているとみていいかどうか、後のデータに待つことにしよう。

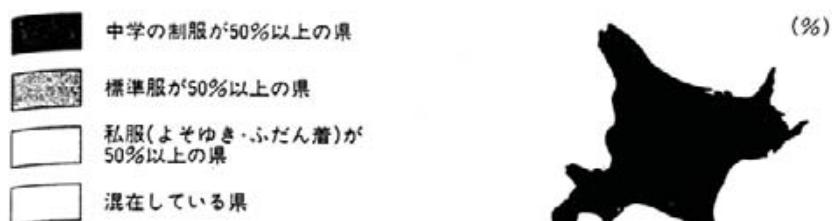
地図1 県別調査協力校数\*

(単位:校、総数 866)

\* 無記入 17



地図2 卒業生(男子)の服装



地図3  
卒業生(女子)の服装

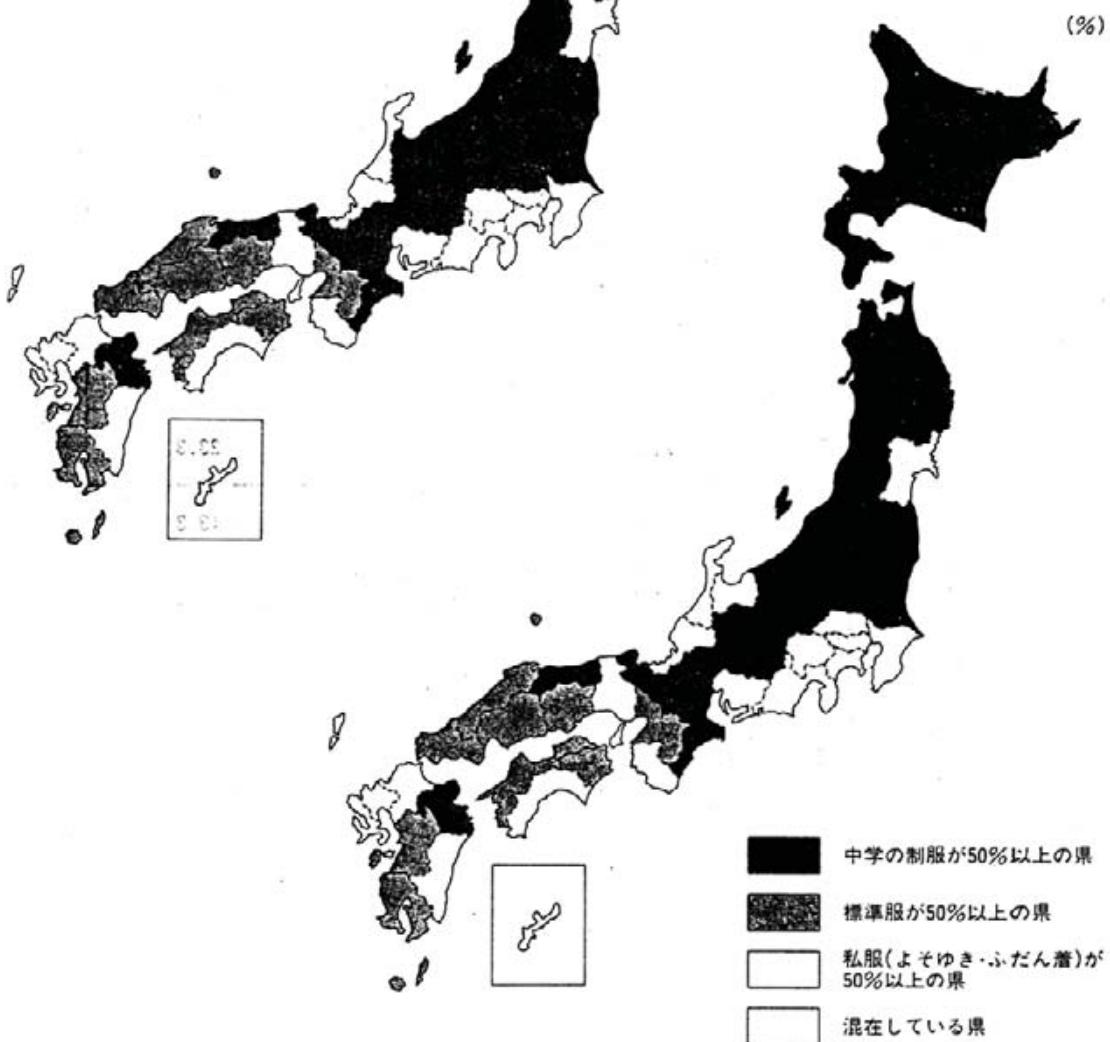


表3 卒業生(男子)の服装×地域

(%)

服 装 \ 地 域	大 都 市 の 学 校	中 小 都 市 の 学 校	農・漁 村 の 学 校
服 装			
中 学 の 制 服	10.0	< 35.0	< 55.6
標 準 服	26.0	24.8	23.5
よ り ゆ き	(54.5)	> 26.3	> 11.4
ふ だん 著	9.1	13.9	9.5

表4 卒業生(女子)の服装×地域

(%)

服 装 \ 地 域	大 都 市 の 学 校	中 小 都 市 の 学 校	農・漁 村 の 学 校
服 装			
中 学 の 制 服	9.0	< 33.5	< 54.4
標 準 服	26.9	23.8	23.3
よ り ゆ き	(59.0)	> 30.1	> 13.3
ふ だん 著	5.0	12.6	8.9

## 式の雰囲気

地図4は、「一同敬礼」をしたかどうかである。かつてあった形の、こうした礼の仕方で式を始めるのがいつの頃から復活したのかは知らないが、とにかく現代では、かなりの地域によくゆきわたっている。地図の上からは、北海道が最もこの率が低く、ついで東北、さらに東京を除く関東と近畿の一部、中国地方と九州の一部であることは、図が示す通りである。

また、「一同敬礼」と似た雰囲気の式を思わせる、「螢の光」「仰げば尊し」を歌った地域を示すのが、地図5と地図6である。一同敬礼と同じく北海道は、共にこの歌を歌う率が低い。他は地図4と重なった傾向を示す県もあり、そうでない県もあるが、それらは読

者のほうで読み取っていただきたい。

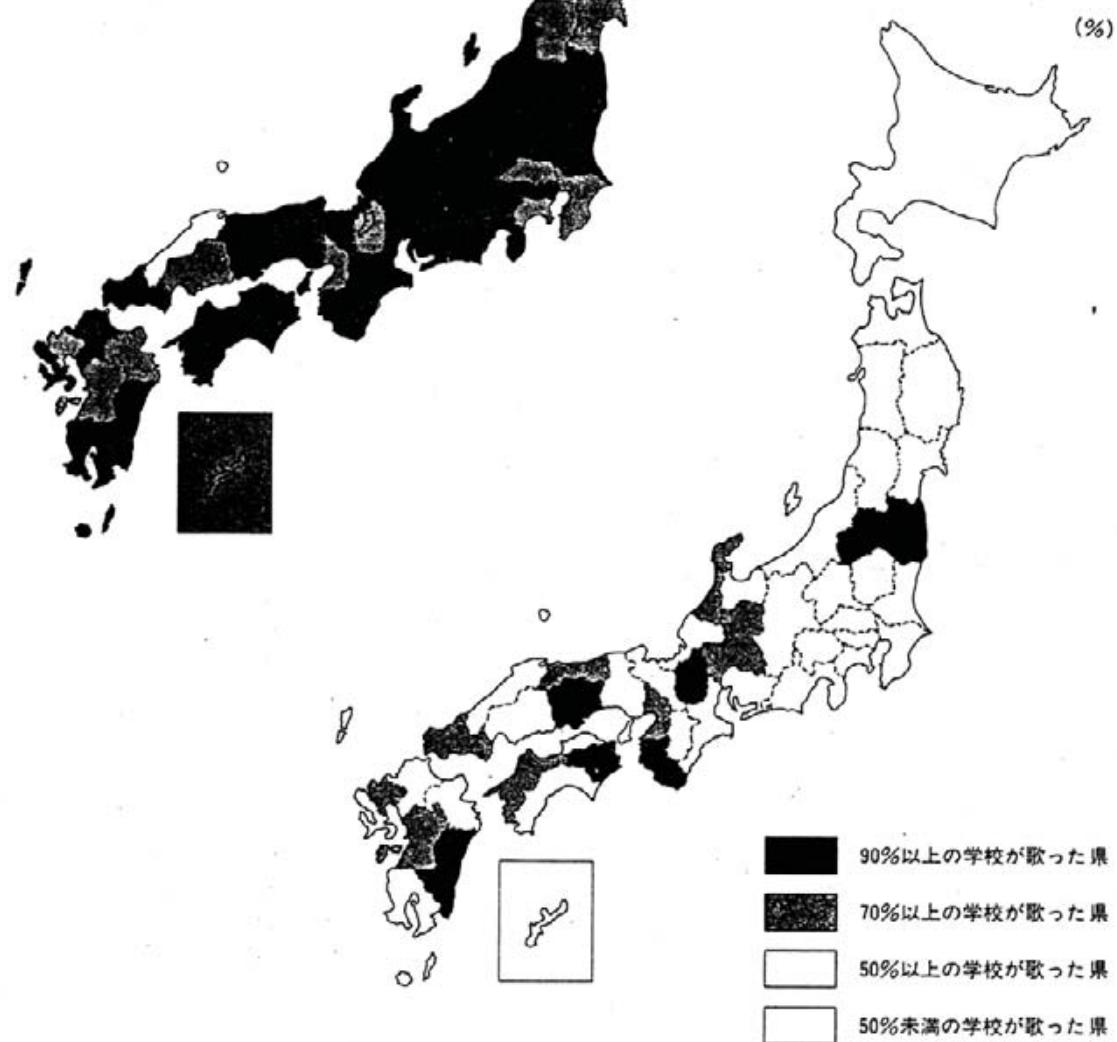
また地図7は、「君が代」を歌った県、地図8は「テーマ」を設けた県である。そして地図9は、これらをまとめて「伝統的な雰囲気」の式をした県についてまとめてみたものだ。90%以上という高い数値を示した県は4県、70~89%が20県だが、図全体としては、とくに地域的な特色とよべるものは見られない。隣り合った県で、けっこうカラーを異にしているケースが少なくない。こうしてみると、とくに「君が代」とか「一同敬礼」など、その切片の一部をとり出して伝統性や保守性の指標とみなすことは、必ずしもふさわしくないと言えそうだ。

地図4 一同敬礼をした県

- 90%以上の学校が敬礼した県
- 70%以上の学校が敬礼した県
- 50%以上の学校が敬礼した県
- 50%未満の学校が敬礼した県



地図5 「螢の光」を歌った県

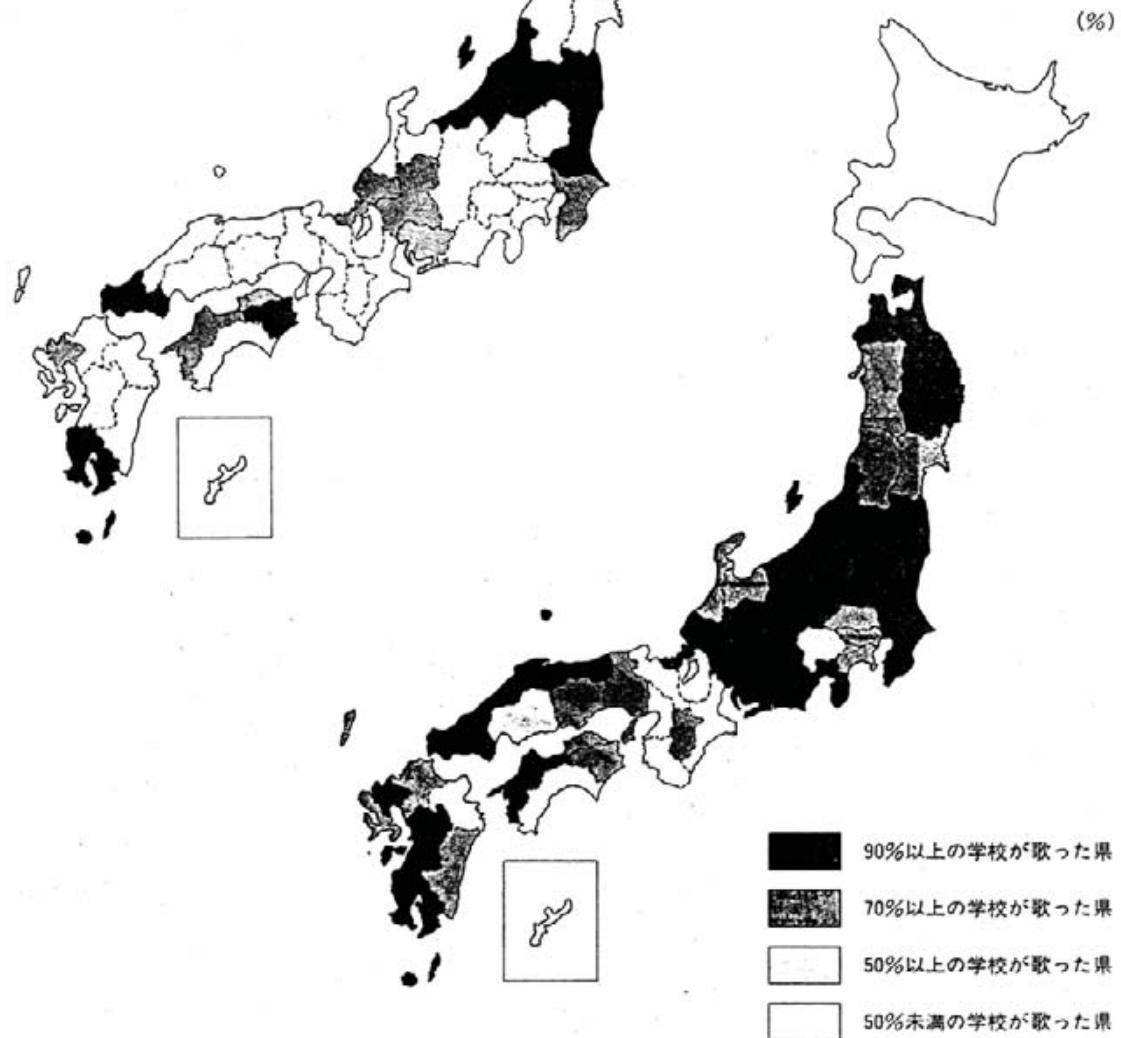


地図6 「仰げば尊し」を歌った県

- 90%以上の学校が歌った県
- 70%以上の学校が歌った県
- 50%以上の学校が歌った県
- 50%未満の学校が歌った県



地図7  
「君が代」を歌った県

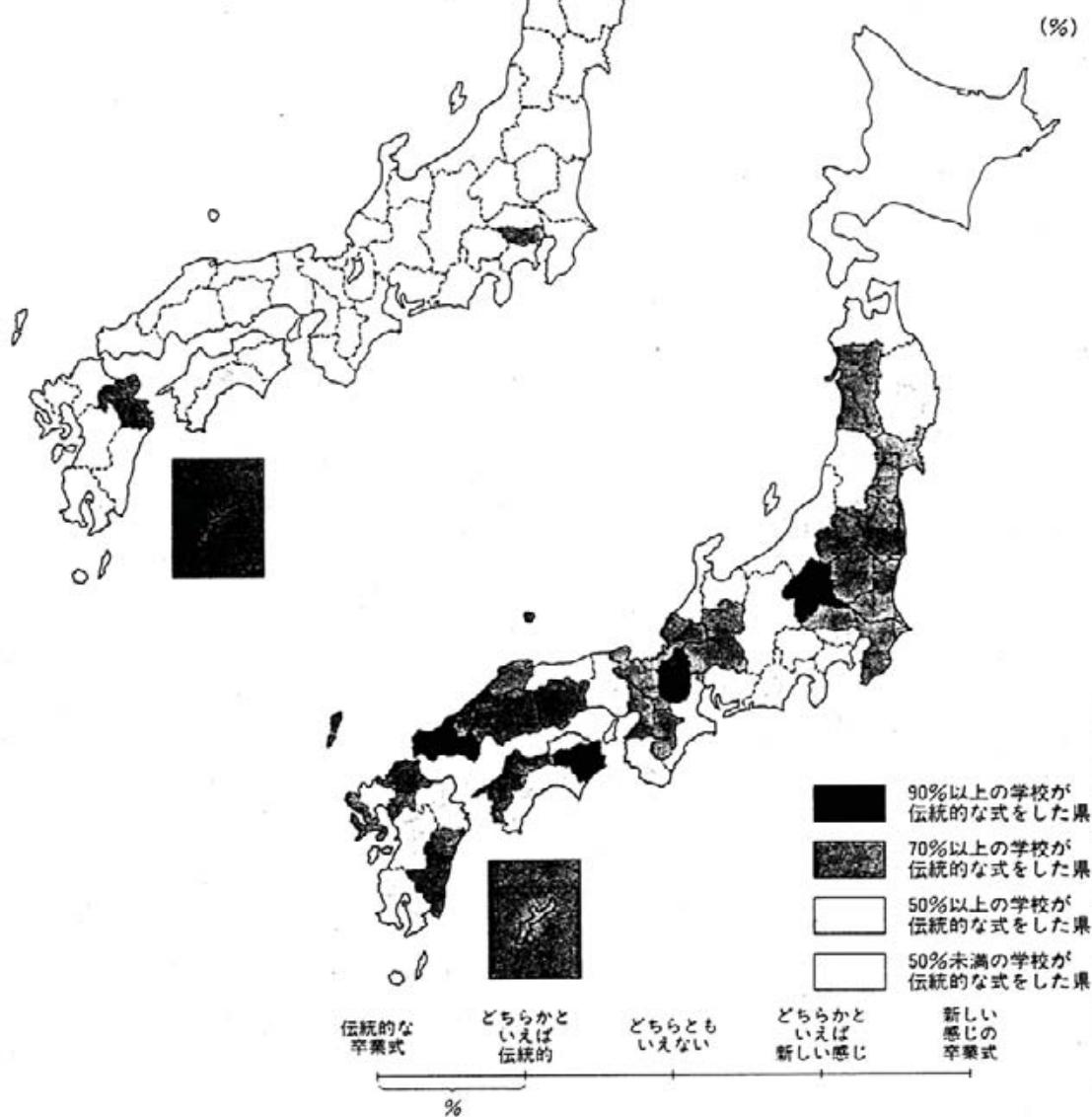


地図8 テーマを設けた県

- 30%以上の学校が設けた県
- 20%以上の学校が設けた県
- 20%未満の学校が設けた県



地図9  
伝統的な雰囲気の  
式をした県



### 3. 卒業式の日まで



とかく行事が多いのが、日本の学校の特色と言われるが、その中でも卒業式は、学校生活最後の「しめくくり」、または「最後の授業」の意味もあるのだろうか。とくに学校が力を入れる行事の1つとされる。(図16) こ

れまでに卒業式の内容を見てきたが、その日に至るまで、どんな準備がなされたのか。学校側の準備、子どもたちの練習の両サイドから見てみることにしよう。

#### 卒業式のための話し合い

まず、卒業式の計画段階での教師間の話し合いをみたものが図17である。これまでに見えてきたような、式のパターン化のせいか、話し合いの回数は意外と少なく、7割近くの学校が1~2回の話し合いで終わっている。話し合いの総時間数はおよそ2時間、1時間程度の話し合いで終わった学校も、25%近くある。その2時間で、どんな話し合いがなされたかをみたものが、次の図18に示してある。全体としては、どのテーマについても、「は

とんど話し合われなかった」か、または「少し話し合われた」程度。辛うじてわりと話し合われているのは、「よびかけの内容(6割)」「会場の装飾(4割)」「証書授与の形(3割)」に過ぎず、他は2割かそれ以下に過ぎない。すなわち、式の周辺的なノウハウについては多少問題にされても、卒業式の根幹に関わる議論やそのテーマをめぐる話し合いは、現状ではほとんど行われていないようである。

戦後、新しい卒業式のあり方を求めて、ど

図16 準備や実施に大変な学校行事

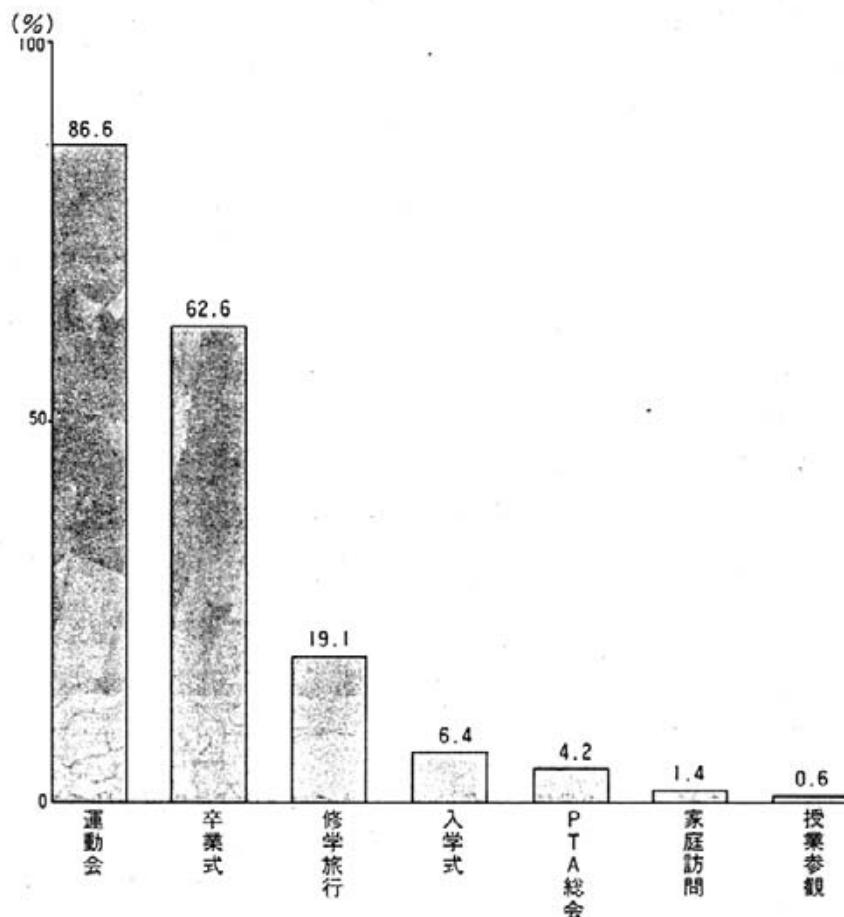


図17 卒業式の話し合い

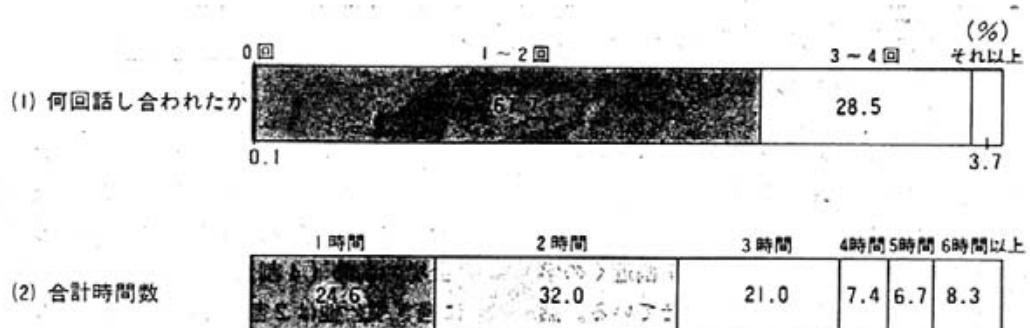


図18 卒業式で話し合われたこと

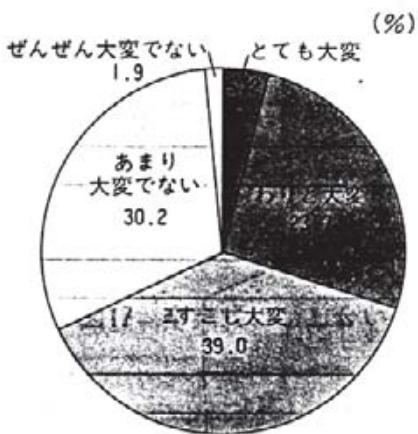
	とても真剣に 話し合われた	わりと話し合われた	少し話し合われた	(%) ほとんど話し 合われなかつた
よびかけの内容	25.7	33.4	22.8	18.1
会場の装飾	7.9	28.8	41.6	21.7
証書授与の形	9.8	22.2	35.9	32.1
入退場の曲	3.1	16.8	44.7	35.4
在校生の参加のさせ方	4.4	11.8	29.4	54.4
卒業式のテーマについて	3.6	8.0	15.2	73.2
君が代を歌うか	6.2	4.6	13.0	76.2
日の丸を掲げるか	6.0	4.7	11.9	77.4
児童の服装はどうするか	1.9	27.1	65.8	5.2
来賓のあいさつをどうするか	1.2	28.5	66.4	3.9
父母の参加について	1.2	13.1	82.0	3.7
職員の服装について	8.8	89.6	0.2	1.4

の学校も燃えた時代があった。しかし今、日本の卒業式は、伝統的な形と精神をかなり生かした形で定着しかかっている。このパターンの卒業式を好んでいるのはだれなのか。ひょっとするとそれは、子どもたちではなく、周囲のおとなたちなのかもしれない。伝統的なスタイルを踏襲するとしたら、話し合いの時間は大して必要でなく、ただ部分的な工夫のための多少の時間と、あとは練習に時間をかけなければよいことになる。

したがって、式の準備については、図19が示すとおり、「とても大変だった」と「わりと大変だった」を合わせても29%と、それほど準備が大変なようすは見受けられないである。

ところが先に見た図16に戻って見ると、卒業式は運動会について「大変な行事」だと考えられており、その他の修学旅行や入学式などの項目を大きくひき離している。しかし卒業式は、これまで見てきたように、毎年たいした変化はなく、準備もそれほど大変ではなさそうなようすだ。とすればこの大変さは、新しいものを生み出そうとするための大変さではなくて、ほぼ決まったパターンを決まり通りにやろうとすることからくる緊張感からの「大変さ」なのかもしれない。すなわち、昔に近い式の進行は、現代っ子たちにはすぐわからないものなので、それゆえに「大変」という受け止め方が生まれるのかもしれないである。

図19 準備の大変さ



## 練習のようす

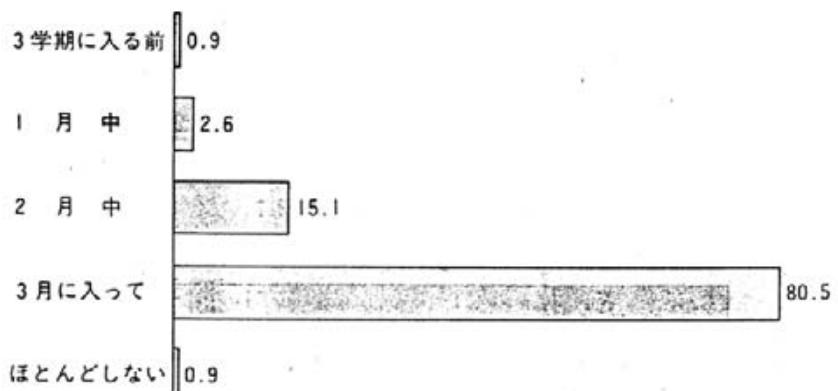
そうした話し合いの後に、卒業式の練習はいつごろからどのように行われているかを見ていこう。図20が示すように、1月または2月から練習を始める学校もないではないが、多くは3月に入って部分的な練習が始まる。

そして体育馆を使っての本格的な練習も2週間前から始められ、1週間前ではほとんどの学校で行われる。体育馆での練習は平均して約5回、合計練習時間は児童1人あたり、約7時間である。

図20 卒業式の練習

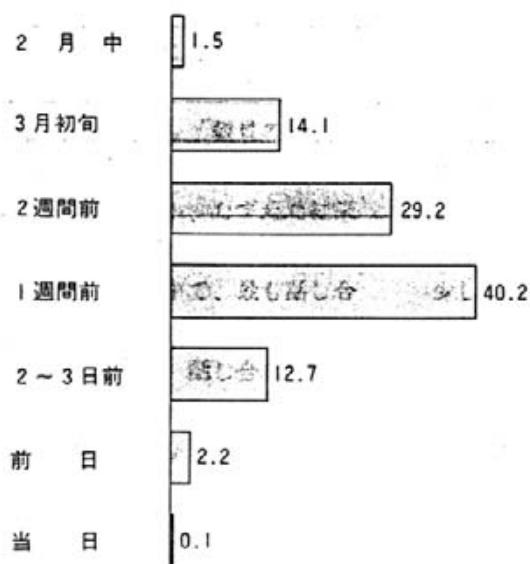
### 1. 部分ごとの練習開始時期

(%)



### 2. 本格的な練習開始(体育馆使用)

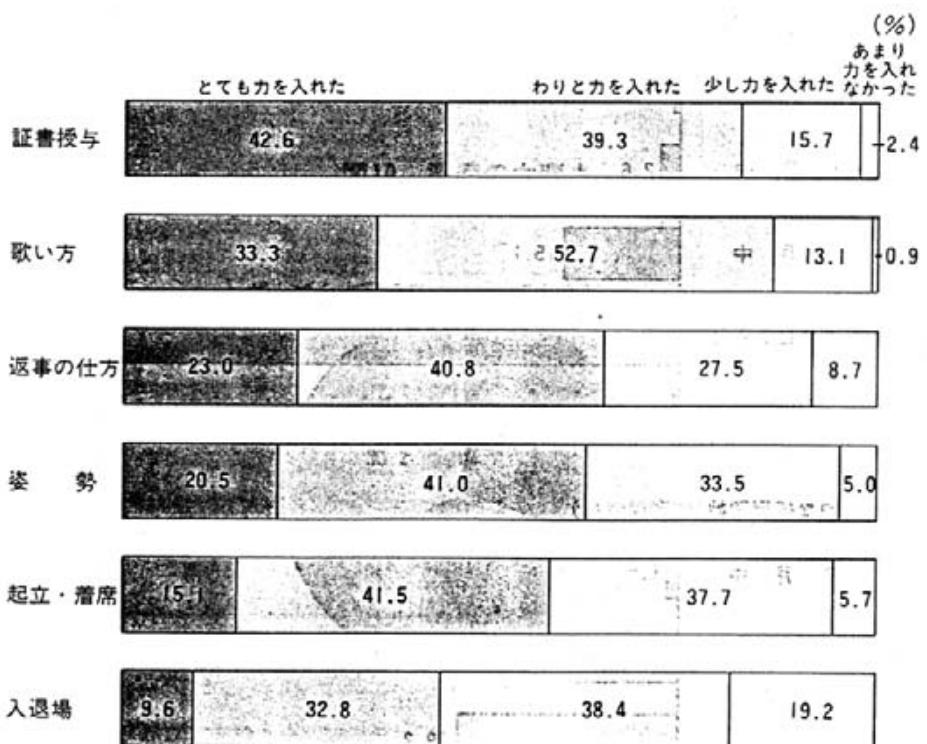
(%)



練習で力を入れた内容は（図21）、「とても」と「わりと」を含めると、「証書授与」と「歌の歌い方」で8割を越し、以下「返事の仕方」「姿勢」などの指導にかなり力を入れているようすがみられる。卒業式が、お祝いの会というより、儀式として扱われている以上、このような指導のあり方は、関係者の間では評価されるのだろうが、外部の者には、わからないものの一つかもしれない。はたしてそう

した指導が、子どもの人格形成上、意味のある事かどうかと、欧米の人びとは首をかしげるだろう。この辺で、6年間のしめくくりとしての「最後の授業」がこれでベストなのか、考えてみることも大切かもしれない。とくに子どもたちにとっては、この最後の1か月は、やや退屈な期間として受けとられているふしも（現場的印象では）見られるのである。

図21 練習で力を入れたところ



## 4. 新しい卒業式を求めて



### 卒業式の評価

卒業式が6年間の学校生活の最後のしめくくりである以上、「心に残る卒業式」であることは、だれしもの願いだろう。そのためには教師たちは、どんな工夫をこらしているのだろうか。

図22は、「よびかけ」から「職員の服装」に至るまで、「昨年と大きく、または一部」変わった点があったかどうか、たずねた結果である。点線は図18の数値を再掲してある。

これによると、13項目の中で、最も話し合いかなされ、変化をしているのは「よびかけ」である。しかし、これとて、話し合われたのは、やっと6割ほどの学校。そして5割強の学校が、前年と違った「よびかけ」をブログラムにのせたに過ぎない。次に変化したのは「入退場の曲」で4割、ついで「会場の装飾」「証書授与の形」。それ以外は、せいぜい1割

かそれ以下でしか前年と変わっていない。「最後の授業」として重要だと考えるなら、そしてまた「準備が大変」とするなら、毎年もっと創意工夫が試みられてもよさそうなものではないか。それとも日本の卒業式は、「子どもにとって」ベストなものと評価されるほど、すでに完成度の高いものなのか。

この点についての教師の意識を探ってみた結果が図23である。昨年の卒業式を「とても・少し不満」とする者は、合わせて5%でしかない。95%は、現在の卒業式にはほぼ満足している。しかし数字をよく見ると、95%のうち、「とても満足」は37%。6割近くは「まあ満足」と、必ずしも手放しの評価はしていない。このへんのかすかな不満の内容を自由記述の中からひろってみると、「長い間のしきたりで行っているので、卒業式に明るさがみられ

ない」、「式次第の内容には、カットしてもよいものがある」「形式的すぎる」、「もっと早く卒業式に対しての提案があれば、もっと考えたものができたのにと、満足しているも

の、ちょっとりもの足りなさがある」などの意見が見られる。このあたりの「もの足りなさ」や「不満」を、もっと大切に考え、とり上げていってもいいのではないか。

図22 昨年と比べて

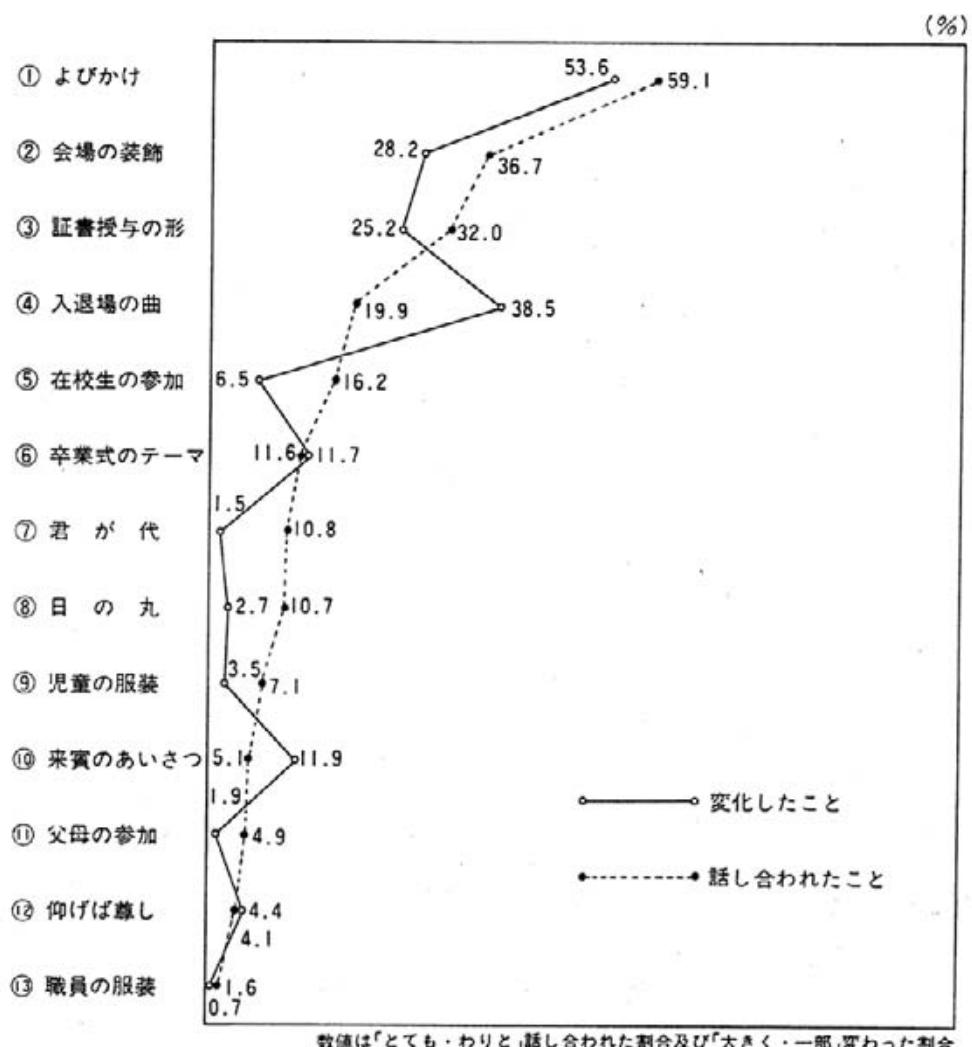
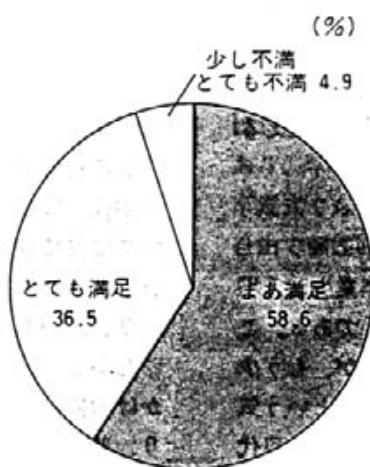


図23 卒業式の満足度



## ちいさな提案

以上、卒業式の現状を多くの角度から見てきたわけだが、われわれの印象では、全体に大きく画一化されている点が気にかかる。こういう儀式ばった（暗い）卒業式をするところもあっていいし、もっとリラックスしてハビイな卒業式（門出の会、祝いの会）があってもよさそうだ。全校で数十人という小規模校から、1千人を越す大規模校まで、そろって「一同敬礼」、「着席」とやっているのも、芸のない話ではなかろうか。それぞれの学校規模やその他の条件によって、少しずつ（もしくは大きく）工夫を加えてみたらどうだろう。ことさらに「最後の授業」、「6年間の総仕上げ」と、肩に力を入れなくともいいのではないか。そうでなくても、現在、学校側が子どもたちにしてやらなければならぬことが多すぎる。行事をへらしていく方向を、どうしたって考えなければ、かんじんの学習指導がおろそかになるのは避けられないだろう。

そうした観点で、実際の例に基づきながら、いくつかの手直しのための提案をしてみよう。

### (1) 卒業式にテーマを

すでに指摘してきたように、多くの卒業式はパターン化し、個性がない。その学校らしい、その年度らしい個性を生み出すためには、テーマを設けるのも一案だろう。しかもそれは、資料3に掲げたようなフレーズばかりではなく、音楽やデザイン（シンボルマーク）など、柔軟に考えてみたらどうだろう。昔のように、小学校卒業後、ほとんどの子が実社会へ出て荒波に翻弄される運命を前にしての卒業式なら、子どもに、過去をふり返って涙させるようなセッティングや雰囲気の卒業式こそふさわしいものだったかもしれない。しかし今は、式というより欧米にみられるようなパーティー（会）と考えたらどうだろう。卒業式が、にぎやかで楽しい会であってはなぜいけないのだろう。われわれおとなは、過去

にひきずられて、暗く儀式的な卒業式を好みとするのだろうが、これは21世紀に活動の場をもつことになる現代っ子には合わないのでなかろうか。

そうした楽しい会への一步として、まず「テーマ」を設けてみることが、卒業式を変える一步となるとも考えられる。

#### (2) 卒業生の入場の仕方に工夫を

多くの卒業式は、拍手の中に卒業生が入場してくるのがスタンダードのようである。このやり方が悪いというのではないが、もう少しバラエティや工夫があってもいいという気がする。音楽ひとつをとっても、ナウい現代感覚にマッチしたものにすれば、その後の会は自然に盛り上がったものになるし、その曲は、いつまでも子どもの胸に残るだろう。現代っ子が音楽的センスにすぐれているのは、最近の若者の結婚披露パーティーに出席する度に感じさせられる。そうした意味で、音楽の使い方や選曲に、もっと工夫をしてはどうか。なお資料1・④は、実践例の中から、特色のあるものをひろってみた。

#### (3) 卒業証書の渡し方に工夫を

昔と違って、総代が一括して証書を受けとるパターンは姿をひそめ、一人ひとりに手渡すやり方が一般化されているようだ。しかしながら小規模校は別として、ふつうサイズの学校では、校長から一人ひとりに手渡すやり方は時間がかかり、また大かたの子どもは（自分の番以外は）退屈だ。しかも大規模校の場合、担任でなく校長から渡されるということが、子どもたち1人ひとりに、そんなにも意味のあることだろうか。時間の制約の中で、矢継ぎ早に子どもの名を呼び、次から次へと証書を手渡す作業が、はたして子どもの心に感銘を残すだろうか。それも一つの方法ではあるが、他にもっと何とか工夫できないものだろうか。

なお資料1・⑤は資料1・①のケース4の例で、卒業式の当日、卒業生の名を呼んだ後に加え

られたコメントである。準備は大変だろうし、大規模校ではむずかしいだろうが、子どもたちには終生忘れられない思い出となったのではないか。

#### (4) よびかけに工夫を

昔の送辞・答辞の形は姿をひそめ、多くの小学校ではよびかけが一般化したようである。すでに見てきたように、教員間の事前の話し合いも、この打ち合わせに一番時間をさいており、工夫もされているようである。

しかし、図22で見てきたように、毎年よびかけの内容が変化するのは5割そこそであり、基本的には、毎年同じという学校が半数近くもあるようだ。

寄せられたよびかけの台本の中には、旧態の答辞や送辞的内容を、ただ、分括して全員で交代に読むかのような、平板なものもあった。参考までに、比較的すっきりとまとまつたよびかけの例を掲げた。（資料1・⑥）

#### (5) みんなで歌う曲やB.G.Mに工夫を

音に対してよい耳を持っている現代っ子の感覚にマッチした新しい曲を、入退場の折に使うことはすでに提唱したが、全員の歌う歌や会場に流す曲も、「螢の光」や「仰げば尊し」にこだわらず、もっと自由に考えたらどうだろう。6年生になったら「クラスの曲（歌）」を選定し、一年間折々にこれを用いたり歌ったりし、それを卒業式の当日に流すのもいいのではないか。なお資料1・⑦には、実際に用いられた曲を掲げた。資料2と合わせて参照されたい。

#### (6) 会場の設営に工夫を

現在のわが国で一番一般的な会場設営は、資料1・⑧[例1]のようなスタイルであるようだ。これも思い切った試みがされてもいいのではないか。参考のため、寄せられた具体例のうち、多少ユニークなものを掲げた。

#### (7) 会場の装飾にも個性を

会場の装飾といえば、紅白幕に盆栽というのもあまりに淋しい気がする。

そこで資料1・⑨では、各学校の会場の装飾についてまとめてみた。装飾に力を入れている学校では、卒業式のテーマに関連した絵や飾りを作ったり、卒業生の作品などを展示しているところが多いようである。

以上いくつかの視点から、資料をもとに、卒業式を変えていく提案をしてきた。なによ

りも大切なことは、卒業式を親や教師の感覚や郷愁に沿ったものとするのではなく、一人ひとりの子どもたちに、成長の喜びを受け止めさせるような、印象の深いものにすることではなかろうか。6年間の学校生活は、授業をはじめとして、なんと言っても学校主導型であり、学校サイドの工夫にも限界があった。卒業式ぐらいは、思い切って子ども中心に、自由で個性的で「明るい」ものにしてはどうだろう。



\*おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。